

赤穂市

# 下高谷遺跡

—坂越郵便局舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2006年2月

兵庫県教育委員会

赤穂市

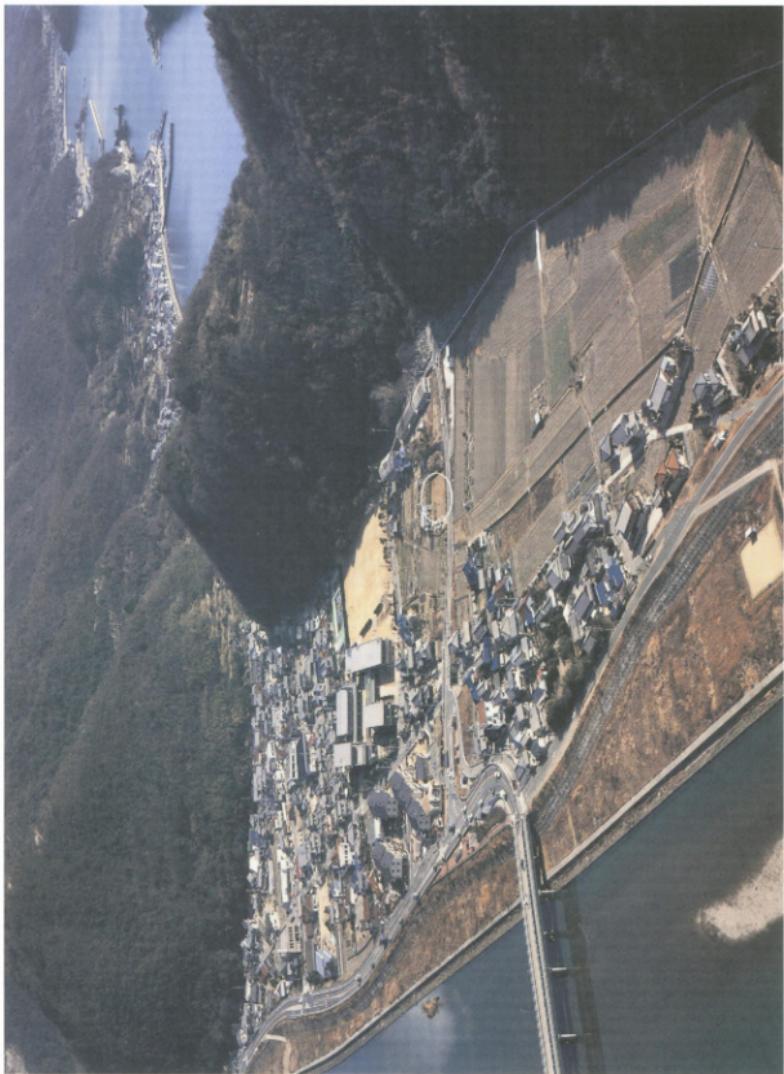
# しも たか や 下 高 谷 遺 跡

—坂越郵便局庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2006年2月

兵庫県教育委員会



調査地及び周辺航空写真（南西から）



調査地区全景（南西から）



須恵器・土師器（椀・皿）



土坑(SK) 1～3 (西から)

## 例　　言

1. 本書は、赤穂市坂越郵便局庁舎新築事業に先立ち、近畿郵政局の委託を受けて、兵庫県教育委員会が平成7年度に実施した下高谷遺跡（赤穂市坂越字下高谷1852-1所在）の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、株式会社小西工務店と請負契約を結び実施した。また、調査後の空中写真撮影はアジア航測株式会社に委託して実施した。
3. 本書の執筆・編集は八木和子と垣本明美の協力を得て、大平 茂が行った。
4. 造構実測は、大平・國本俊子が行い、遺構写真は大平・國本が撮影した。遺物実測、遺構と遺物トレスは八木・垣本が実施した。また、遺物写真は（株）アコードに委託した。
5. 本書に使用した座標値は、平成14年4月1日の測量法改正に伴い、新たな世界測地系に基づく平面直角座標第V系の数値に補正している。また、方位は座標北であり、レベルは東京湾平均海水準（T.P.）である。
6. 遺物の記載番号は、本文・挿図・図版ともに同一番号にしている。
7. 本報告にかかる出土遺物及び写真関係等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所と兵庫県教育委員会魚住分館にて保管している。
8. 発掘調査・報告書作成にあたっては、坂越郵便局、赤穂市教育委員会及び地元下高谷の方々にご協力を頂いた。記して深く感謝するものである。

## 凡　　例

1. 遺物番号について、土器類は通し番号のみで、鉄器は頭にFを付け土器類と区別している。ただし、No. 79以降とF10以降は写真のみで、実測図を載せていない。
2. 土器の実測図断面については、土師器は白抜き、須恵器は黒塗り、磁器は網掛け、瓦器は砂目とし区別している。

## 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査概要とその組織体制	2
1. 分布（試掘を含む）調査	2
2. 本発掘調査	2
3. 整理調査	4
第2章 遺跡をとりまく環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の記録	11
第1節 遺跡の立地と基本堆積土層	11
第2節 検出遺構と遺物出土状況	12
第3節 出土遺物	22
第4章 まとめ	29
第1節 下高谷遺跡の遺構の年代	29
第2節 遺跡の性格及びその位置づけ	30

## 挿 図 目 次

第1図 調査地位置図.....	1
第2図 分布（試掘）調査区及び本調査区設定図 .....	3
第3図 発掘作業参加者 .....	4
第4図 赤穂付近の地形区分図 .....	6
第5図 赤穂付近の地質図 .....	7
第6図 下高谷遺跡周辺の遺跡分布地図 .....	10
第7図 機械掘削風景.....	11
第8図 調査区全体図（遺構配置図）及び土層断面図.....	13
第9図 土坑(SK) 1～3 平面図及び断面図 .....	15
第10図 土坑(SK) 4・5 平面図及び断面図 .....	16
第11図 挖立柱建物跡(SB) 1 平面図及び断面図 .....	18
第12図 挖立柱建物跡(SB) 2 平面図及び断面図 .....	19
第13図 挖立柱建物跡(SB) 3 平面図及び断面図 .....	20
第14図 挖立柱建物跡(SB) 4 平面図及び断面図 .....	21
第15図 土坑(SK) 1・2 出土土器 .....	23
第16図 土坑(SK) 3・4・5 出土土器 .....	24
第17図 ピット(Pit)群 出土土器 .....	25
第18図 包含層 出土土器類 .....	27
第19図 土坑・ピット群及び包含層 出土鉄器類 .....	28

## 表 目 次

第1表 赤穂市気象観測データ .....	5
第2表 遺跡地名表 .....	10

## 卷頭カラー写真目次

- 図版1 調査地及び周辺航空写真  
図版2 上 調査地区全景（南西から）  
下 須恵器・土師器（擁・皿）  
図版3 土坑(SK) 1～3（西から）

## 写真図版目次

- 図版1 上 調査地区遠景（南西から）  
下 調査地区近景（南西から）  
図版2 調査地区全景（南西から）  
図版3 上 調査前近景（北西から）  
下 土層断面  
図版4 上 遺構全景（南東から）  
下 土坑(SK) 1～3（西から）  
図版5 上 土坑(SK) 1（西から）  
中 土坑(SK) 2（北から）  
下 土坑(SK) 3（北から）  
図版6 上 土坑(SK) 4（北東から）  
中 土坑(SK) 5（南東から）  
下左 ピット(Pit)113 下右 ピット(Pit)123  
図版7 上 挖立柱建物跡(SB) 1（北から）  
下 挖立柱建物跡(SB) 2（北東から）  
図版8 上 挖立柱建物跡(SB) 3（南東から）  
下 挖立柱建物跡(SB) 4（北から）  
図版9 上 挖立柱建物跡(SB) 1 ピット(Pit)群断ち割り  
下 挖立柱建物跡(SB) 2 ピット(Pit)群断ち割り  
図版10 上 挖立柱建物跡(SB) 3 ピット(Pit)群断ち割り  
下 挖立柱建物跡(SB) 4 ピット(Pit)群断ち割り  
図版11 上 試掘調査 中 人力掘削 下 遺構掘削  
図版12 土坑(SK) 1 出土遺物①  
図版13 上 土坑(SK) 1 出土遺物②  
下 土坑(SK) 2 出土遺物①

- 図版14 上 土坑(SK) 2 出土遺物 ②  
下 土坑(SK) 3・4・5 出土遺物
- 図版15 ピット(Pit)群 出土遺物 ①
- 図版16 ピット(Pit)群 出土遺物 ②
- 図版17 上 ピット(Pit)群 出土遺物 ③  
下 包含層出土遺物 ① 須恵器
- 図版18 包含層出土遺物 ② 須恵器・土師器
- 図版19 包含層出土遺物 ③ 磁器・土錘・鐵器 ①
- 図版20 上 包含層出土遺物 ④ 鐵器 ②  
下 包含層出土遺物 ⑤ 銀治津

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経過

平成7年、郵政省近畿郵政局では赤穂市板越に所在する坂越郵便局の建替え計画を進めていた。

近畿郵政局はこの計画にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて、赤穂市教育委員会に照会する。しかし、市教育委員会では未分布調査地区でもあり、国や公団関係の開発事業は県が行うという県と市の役割分担に基づいて、埋蔵文化財調査事務所に対応を求めてきた。そこで、改めて近畿郵政局建築部から県に照会（平成7年7月3日付 建設（一）50）をいただき、県が分布調査（試掘を含む）を実施（7月20日）することとした。

その結果、建設用地全域に平安時代後期から末期にかけての遺構（柱穴）及び遺物包含層が存在すると判明したため、この遺跡の取り扱いについて協議に入るとともに、照会に対して発掘調査が必要な旨の回答を行った。

郵政局としては当該地の買収と地元との調整も終わっており、計画変更是不可能な状況で早急に発掘調査をして欲しいと要望される。一方、埋蔵文化財サイドは今年度内の調査期間及び調査員の確保が極めて難しい状況にあった。

この後、県教育委員会埋蔵文化財調査事務所は近畿郵政局建築部と遺跡保存のための具体的な協議を重ね、急速11月末になって年明けから調査に入ることを確認し、遺跡の発見届、調査依頼等諸手手続きにかかったのである。



第1図 調査位置図

## 第2節 調査概要とその組織体制

### 1. 分布（試掘を含む）調査（遺跡調査番号950195）

分布（試掘）調査は、平成7年7月下旬に実施した。調査の目的は、庁舎新築事業用地内の遺構・遺物の有無を確認することにある。試掘坑（幅2m）は用地範囲に合わせ、長さ約4mから16mのトレチを合計5ヶ所に設定した（第2図）。

各トレチの掘削は重機を使用した後、人力掘削により断面と平面の精査を行い、土層の堆積状況と遺構・遺物の有無確認に努めた。

いずれのトレチも表土下60~75cmで土師器・須恵器の遺物包含層を確認し、さらに第1・5トレチでは柱穴（ピット）を検出した。遺物の年代は、平安時代後期から末期頃と考えられる。

遺構面は、事業予定地全域に広がる可能性が高い。なお、この下層は旧河道の堆積層であり、遺構・遺物とも認められなかった。

#### （1）発掘調査の組織体制

調査主体 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

調査担当 調査第1班 調査専門員 西口 和彦 技術職員 深江 美憲

（2）調査実施期日 平成7年7月20日

### 2. 本発掘調査（遺跡調査番号950365）

前記した分布（試掘）調査の結果を受けて、平成8年1月中旬から建物建設用地にあたる部分の本調査に入った。調査は、南北約28m東西約22.5mのいびつな長方形の一角を除いた調査区である（第2図）。調査面積は約557m<sup>2</sup>であった。

調査実施の目的は、この部分の遺構の抜がり（範囲）及び性格、さらに正確な年代を確認することにある。特に、平安時代後期の遺構の内容実態を把握することが重要な観点である。

調査は用地を南北に2分割、さらに東西も2分割する4地区に分けて実施した。地区の名称は南1区・2区、北1区・2区である。方法は、現代の耕作土以下第4層遺物包含層上面までを重機によって除去し、その後人力による掘削・精査を行った。また、写真撮影については枠組み足場を使用して行った。

なお、用地内で当初予定した全ての掘削土の仮置きが難しくなったため、機械掘削の約半分は場外持ち出しとなつた。

#### ◎平安時代後期～末期の調査

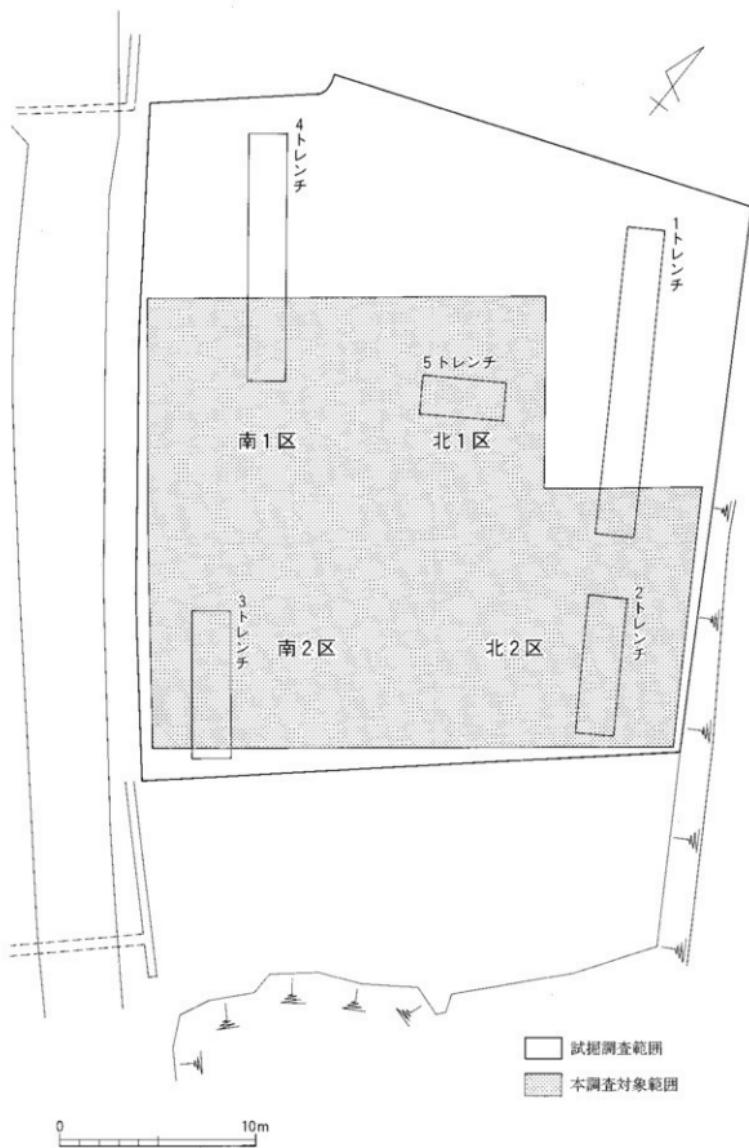
機械掘削終了後、南1区・2区の側溝掘りを行ったところ、分布（トレチ）調査で発見した第5層上面に遺構は認められず、また第4層は遺物もほとんど含まないことが判明した。そこで、第5層の洪积堆積層と6層の遺物包含層の掘削に移り、第7層上面での遺構検出に務めた。遺構は、掘立柱建物となる柱穴群と土坑を検出した。遺物には、柱穴・土坑及び包含層出土の須恵器・土師器・瓦器・磁器・鉄製品等がある。

#### （1）発掘調査の組織体制

調査主体 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

事務担当 企画調整班 調査専門員 輔老 拓治 主査 深井 明比古

調査担当 調査第1班 調査専門員 西口 和彦 主査 大平 茂



第2図 分布（試掘）調査区及び本調査区設定図

臨時職員 國本 紗子 現場事務員 中野 美代子

(2) 調査実施期日 (自) 平成8年1月18日～(至) 平成8年3月7日

### 3. 整理調査

近畿郵政局から委託を受けた兵庫県教育委員会は、発掘調査の成果を社会教育資料とし活用するためには、平成17年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において整理作業を実施した。

整理作業の内容は、1. 水洗 2. ネーミング 3. 接合・復元 4. 実測・拓本 5. 写真撮影  
6. トレイス 7. 原稿執筆 8. レイアウト 9. 印刷 10. 報告書刊行となる。

出土遺物は、平安時代後期から末期の土坑・柱穴(ピット)及び遺物包含層から発見した土器類と金属製品で、整理用コンテナ8箱である。

なお、出土遺物の一部は平成9年6月の新坂越郵便局の開局時に、局内において特別展示を行った。

#### (1) 整理調査の組織体制

調査主体 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

調査体制 事務担当所長 平岡 直昭

主幹 大西 義明

主幹 輔老 拓治

主幹 栗原 利光

主任調査専門員 池田 正男

主査 菊田 淳子

調査担当 主査 大平 茂

整理担当 主査 森内 秀造

主任技術員 八木 和子

國化技術員 堀本 明美



第3図 発掘作業参加者

## 第2章 遺跡をとりまく環境

### 第1節 地理的環境

ここ赤穂市は兵庫県の西南端に位置し、西は岡山県備前市及び和気郡日生町に接している。姫路市街地から西に約25km、相生市街地から南西へ約10kmにある。

市域は東西約15km、南北約15kmとはほぼ正方形を呈し、面積は約127km<sup>2</sup>である。南は瀬戸内播磨灘に面し、天然の良港板越湾には生島がある。南部の旧城下町、中部の周世・高野・坂越、北部の有年を中心に入口約52,400人を擁し、忠臣蔵のふるさと観光都市、塩田跡地を利用した工業と農・漁業の町もある。

交通関係では、市の中部を東西に山陽自動車道が走り、北部では国道2号線・南部は国道250号線が同じく東西に走る。鉄道交通にはJR山陽本線と赤穂線がある。

気候は、瀬戸内海の影響が強く過去10年の年間平均気温15.8℃、年間平均降水量1,099.9mm、年間平均降水回数87.3回と温暖で、雨量の少ない状況である。ただし、近年は台風と梅雨の時期に集中豪雨を受ける傾向があり、水害も目立っている。千種川河口部の赤穂アルタを見ると古代以降拡大しており、この頃にも度々大きな洪水・氾濫があったと推測される。

市内の地形は、大きく山地・丘陵地・低地の三つから成り立っている。山地部分は西播山地の西南端に当たり、起伏量200~400mの小起伏山地である。この山地に付着するような形で西有年の鯨崎付近や坂越の周辺、市街地の北に丘陵地形がある。そして、市の中央部を千種川が南北に貫流し、この川沿いに氾濫原と赤穂アルタ（三角州）、福浦に低地が見られる。海岸部は赤穂アルタを除き、沈降性の海岸である。

地質は低地部が新生代第四紀の砂礫層や砂層・粘土層で、山地は中生代後期白堊紀の花崗岩系・流文岩系からなっている。

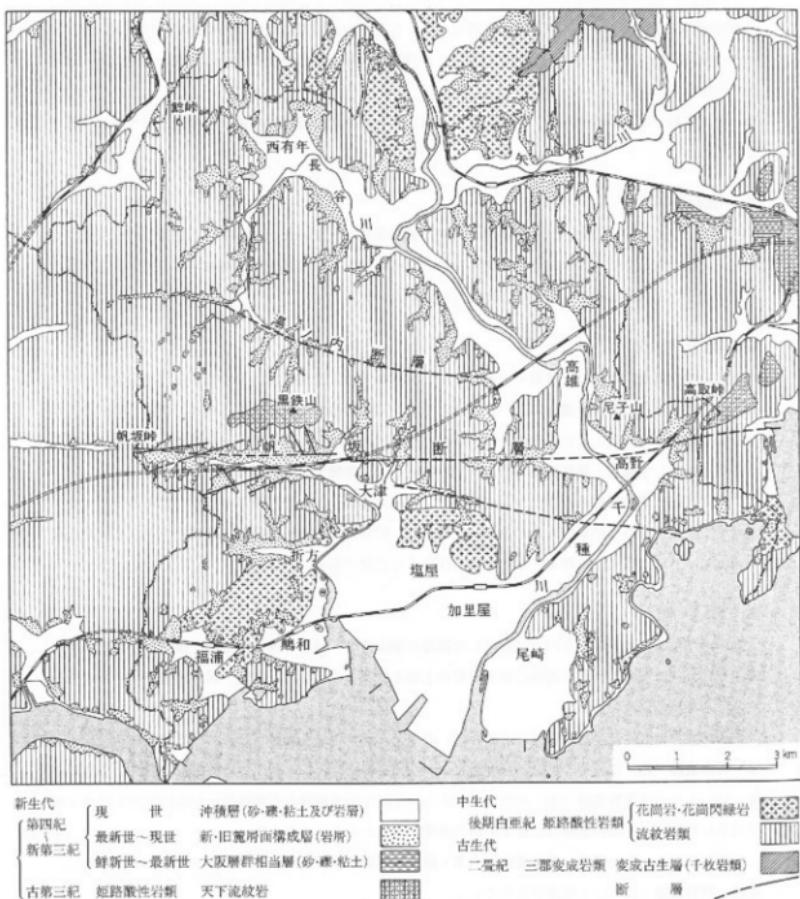
下高谷遺跡は、兵庫県赤穂市坂越字下高谷に所在する。赤穂城跡から北東へ約4kmに位置し、千種川東岸の自然堤防上にある。標高は、調査時地表面で約3.7m（T.P）を測る。

第1表 赤穂市気象観測データ（平成16年の月別平均値）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均
気温℃	4.8	6.3	8.7	14.6	19.6	23.3	28.4	27.2	25.3	18.5	14.0	8.7	16.6
降水量mm	2.5	44.5	56.5	59.0	225.0	170.0	44.5	171.0	313.5	253.0	52.5	92.5	123.7
降水回数	1	7	6	8	11	14	6	12	13	10	7	5	8.3



第4図 赤穂付近の地形区分図 (『赤穂市史』第1巻から転載、一部改変)



第5図 赤穂付近の地質図（『赤穂市史』第1巻から転載）

## 第2節 歴史的環境

赤穂市内の遺跡は地理環境に合わせて分割することが可能で、千種川下流域（矢野川・長谷川を含む）の有年地区と千種川河口部及び臨海域に存在する。ただし、河口部は播磨地域の他の河川流域に比較すると、臨海平野（赤穂三角州）陸地化の進行した時期が古代末から中世初頭以降と遅かったため、遺跡分布密度は薄となっている。

以下、本稿では下高谷遺跡（1）が位置する河口部・臨海域の各時代の遺跡について年代順に概観してみよう。

### 1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡（遺物）は、これまで確実な例が発見されていない。しかし、北隣りの佐用郡や東隣りの旧揖保郡で発見されている地理的条件から考えると、有年の馬路池遺跡等サヌカイト片の散布する遺跡があり、今後確認される可能性は非常に高いといえる。

### 2. 繩文時代

塩屋の堂山遺跡（11）に、前期・中期・後期・晩期の土器片と石器が出土している。年代的には後期のものが大半を占めるが、遺構は見つかっていない。尾崎の猪壺谷遺跡（38）では、後期・晩期の上器と石器が出土している。また、高雄・根木遺跡（13）でも、後期と晩期の土器が出土している。その他、土器散布地として塩屋・鶴田遺跡（6）、小島遺跡（30）、赤穂大橋下遺跡（34）がある。

このように当時の臨海部に面したものが多く、漁労を主にした小集落が存在したのであろう。なお、現在まで遺構に伴うものがほとんどない状況であり、旧石器と同様に段丘部上の調査、そして後期以降の遺跡では低地に存在する埋もれた遺跡にも注意する必要がある。

### 3. 弥生時代

弥生時代前期の遺跡は、市内では前記した塩屋の堂山遺跡（11）のみである。千種川中・上流域の佐用郡や宍粟市には繩文晩期の遺跡に弥生前期の土器を伴うものが多く、高雄・根木遺跡などでも今後発見される可能性が高い。

中期の遺跡では、この堂山遺跡（土器のみ）の他、木津・段ノ上遺跡（17）に竪穴住居跡、そして高雄・根木遺跡（13）に若干の遺構・遺物が見つかっている。なお、千種川の川原で採集され、上高野遺跡（16）もしくは高野遺跡（20）の出土と考えられる扁平錐式銅鐸の石製錫型片が放松岡秀夫により再発見されたが、これらの遺跡では弥生中期の遺構が見当たらないのである。

後期になると、先の高雄・根木遺跡と木津・段ノ上遺跡は集落規模が拡大するようである。さらに、真殿・門前遺跡（12）にも集落が出来てくる。

その他、中期から後期の土器散布地として高山遺跡（10）や、南野中中州遺跡（32）、南野中川岸遺跡（33）、千鳥ヶ浜散布地（35）、尾崎・大塚遺跡（36）がある。

遺跡数は増加するものの、木津・段ノ上遺跡以外に拠点集落になるものがない。有年地区には有年原・田中遺跡や東有年・沖田遺跡の拠点集落が存在する。この点、段ノ上遺跡だけでは少し物足らない。上流域の周世・入相遺跡でもよいのだが、松岡が上流域のものでないと推定した銅鐸の鋳型があるのでから、どこかに中期の拠点集落が存在したはずである。千種川の流路・水量の不安定さが原因で、流失

したが、まだ低地の自然堤防上に埋没しているのではないだろうか。なお、堂山遺跡では終末期の製塩土器が発見され、後期の周世・入相遺跡の製塩土器と共にこの頃から赤穂で製塩が始まつたことも明らかになった。

#### 4. 古墳時代

赤穂市内は、前期の古墳と古墳時代を通じて前方後円墳が存在しない地域である。古墳の出現は、中期後半に入る坂越のみかんへの山古墳（29）からである。坂越湾を見下ろす位置に造られた径35m前後の大型円墳であり、造り出しを持つ可能性が高い。埋葬主体は未調査であるが、円筒埴輪を採集している。後期古墳には、6世紀後半に造られた尾崎・大塚古墳（37、横穴式石室全長8.6m）、高取山古墳群（21、積石塚もある）、高伏山古墳群（22）、そして6世紀末から7世紀の大林古墳群（7、大半消滅）、真殿・門前古墳群（12）、船戸山古墳群（14）、生島古墳群（27）、鍋島古墳（28）、小島古墳群（31）などがある。

これらの古墳のうちみかんへの山古墳と大塚古墳、そして生島古墳群・小島古墳群など臨海部の古墳は海を生活基盤とした人々の墳墓と考えられている。

また、集落遺跡については堂山遺跡（11）に前期初頭の貝の入った土坑と、後期の乾し貝作りの遺構とされる竈跡と貝塚がある。その他、高山遺跡（10）、真殿・門前遺跡（12）、木津・段ノ上遺跡（17）、高野遺跡（20）などに土師器・須恵器が見つかっている。しかし、古墳と比較して集落数の少なさが挙げられる。現在の集落と重なっているのか未だ不明な点も多く、今後の検討すべき課題である。

#### 5. 歴史時代

奈良時代の律令体制になると、赤穂郡は上郡町域の筑磨郷か有年地区の大原郷の地域に郡衙が置かれたと考えられ、市城は大原郷と坂越郷そして周勢郷に属している。

遺跡としては堂山遺跡（11）、周勢郷に入る高雄・根木遺跡（13）や木津・段ノ上遺跡（17）がある。根木遺跡には掘立柱建物が見つかり、堂山遺跡と段ノ上遺跡では須恵器と土師器が出土している。また、平城宮跡出土の木簡に「赤穂郡大原郷」と記載されたもののが多数あり、大原郷に渡来系氏族「秦造」が居住していたことが分かっている。なお、宝珠山妙見寺（24）は寺伝によるとこの頃建立され、平安時代に再興されたという。

平安時代では後期になると、堂山遺跡（11）に揚浜系の塙浜が出現し、下高谷遺跡（1）では掘立柱建物の生活が営まれる。また、赤穂市役所遺跡（4）からは須恵器や瓦器碗が工事中に発見され、山岳寺院とされる岩屋寺跡（8）も造られている。

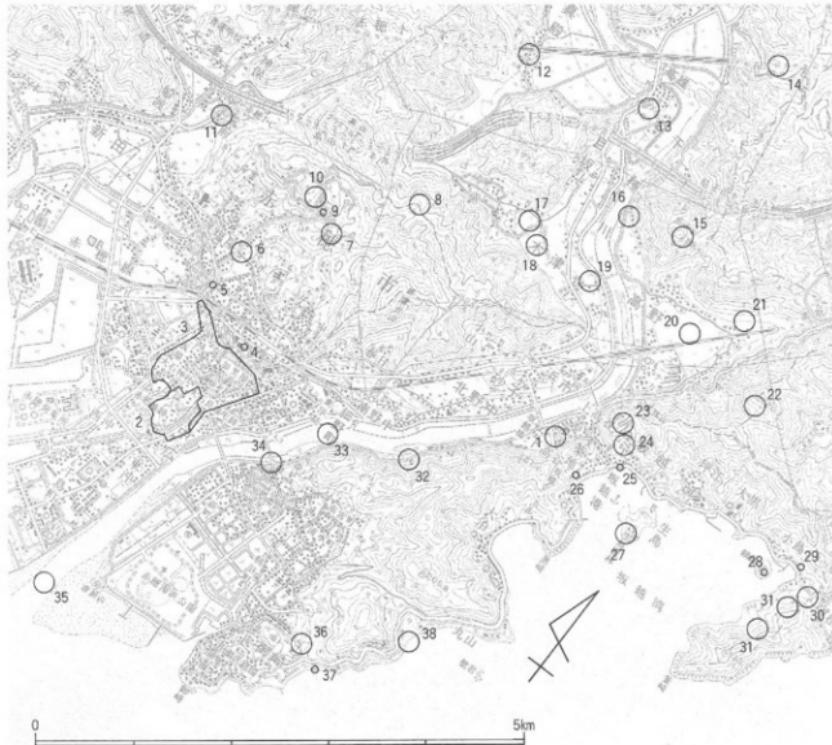
奈良・平安時代では、このように生産関係と莊園関係の遺跡や仏教流布の遺跡を見ることができる。さらに、注目すべきは古墳時代以来の良港坂越浦が、海上交通の中心地になっていったことである。

中世に入ると、木津・段ノ上遺跡（17）や木津・原遺跡（18）、真殿・門前遺跡（12）があり、坂越莊・赤穂莊などの莊園も成立してくるのである。八祖山経塚（26）では、鎌倉時代の径8m前後・高さ2mに山石を積んだ中から陶製の經筒が見つかっている。

また、城跡として尼子山城跡（15）、茶臼山城跡（23）、坂越浦城跡（25）などが知られている。

千種川の三角州は、その発達に併せ塙浜として利用されると共に、千種川河口部の津も海上交通の重要地になった。そして加里屋の地に赤松一族が砦を築いたのである。

近世には、この地に池田家や浅野家の赤穂城（2・3）が築城され、益々塩生産で栄えたのである。



第6図 下高谷遺跡周辺の遺跡分布地図

No	遺跡名	年代
1	下高谷遺跡	平安後期から鎌倉初頭
2	赤堀城跡	近世
3	赤堀城下町跡	近世
4	赤堀市役所遺跡	中世
5	阿努陀堂貝塚	中世
6	塙屋・塙田遺跡	縄文時代
7	大林古墳群	古墳時代
8	岩屋寺跡	平安・中世
9	鳥谷布瓦出土地	平安時代
10	高山遺跡	弥・古・奈・平・中世
11	塙屋・童山遺跡	繩・弥・古・奈・平・中世
12	真殿・門前遺跡	弥・古・奈・平・中世
13	高塙・根木遺跡群	古墳時代
14	船戸山古墳群	縄文・弥生・奈良・近世
15	尾子山城跡	中世
16	上野高遺跡	弥生・古墳・中世
17	木津・段ノ上遺跡	弥・古・奈・平・中世
18	木津・原遺跡	中世

No	遺跡名	年代
19	木津・原垣内遺跡	古墳時代
20	高野遺跡	弥・古・奈・平・中世
21	高取山古墳群	古墳時代
22	高伏山古墳群	古墳時代
23	茶臼山城跡	中世
24	宝珠山妙見寺跡	中世
25	坂越浦城跡	中世
26	八祖山城跡	中世
27	牛島古墳群	古墳時代
28	鍋島古墳	古墳時代
29	みかんのへた山古墳	古墳時代
30	小鳥遺跡	繩・弥生時代
31	小鳥古墳群	古墳時代
32	南野中・中州遺跡	弥生時代
33	南野中川岸遺跡	弥生・古墳時代
34	赤堀大橋下遺跡	縄文・弥生時代
35	千鳥ヶ浜散布地	弥生時代
36	尾崎・大塚遺跡	弥・古・奈・平・中世
37	大塚古墳	古墳時代
38	猪巻谷遺跡	縄文・弥生時代

第2表 遺跡地名表

## 第3章 調査の記録

### 第1節 遺跡の立地と基本堆積土層

#### 1. 遺跡の立地

調査地は千種川東岸の低地、周世及び木津・高野で屈曲した川の流れが直線的に赤穂アルカへ向かう位置にあたる自然堤防の微高地にある。

微地形分析から見れば、当該地区は千種川が形成した居住域に使用されたであろう自然堤防の微高地と、水田に利用された後背湿地・旧河道から成りたっていることが理解出来る。さらに、東は坂越湾との間に存在する山並が南北に延びている。

#### 2. 基本堆積土層と検出遺構

確認調査及び本調査の土層断面観察からみた基本堆積土層は、次のとおりである。

第1層 — 暗灰黒色耕作土（厚さ約20cm）

第2層 — 明黄褐色細砂（厚さ25～35cm）洪水堆積層及び旧耕作土

第3層 — 明茶褐色細～中砂（厚さ15～20cm）洪水堆積層

第4層 — 明黒褐色土（厚さ10～20cm）遺物包含層

第5層 — 暗黄褐色細～中砂（厚さ10～20cm）洪水堆積層

第6層 — 晴茶褐色土（厚さ10～15cm）遺物包含層

第7層 — 暗黄褐色細砂～疊、古代末の河川堆積層と考えている。

このように、遺跡周辺は古代末以前そして中世以後も度々洪水に見舞われた地だったことが窺われる。

遺構面は、現地表下平均1.10mの第7層上面である。発見した遺構には、土坑（SK1～5）5基と掘立柱建物跡（SB1～4）4棟を含むピット（柱穴）群がある。なお、このうちピット群には、埋土の色調に茶褐色土と淡褐色土の異なるものが存在することから考えると、第6層を切り込んだものがあったかも知れない。



第7図 機械掘削風景

## 第2節 検出遺構と遺物出土状況

### 1. 概要 (第8図)

主な遺構は土坑5基と掘立柱建物跡4棟であり、調査区内の北1区・南1区・南2区に集中する。北2区には、ほとんど遺構が見られない。分布（試掘）調査でも2・3トレチでは東への抜がりが認められず、また1・4トレチにピット群を発見した結果から見ても、東側は山沿いを流れる旧河道が存在するのであろう。その他、調査区内では多くのピット（柱穴）を検出したが、建物跡と認識できたものは4棟のみであった。

周辺の微地形を見ると調査区外の西に南北に延びる微高地があり、そこから西へ徐々に低くなっている。この微高地（自然堤防上）に、平安時代後期から末期の集落（屋敷跡）が存在したようである。

### 2. 遺構

#### 土坑(SK) 1 (第9図、写真図版4・5上)

検出状況 南2区で検出した。土坑2の西側に隣接する。

形態規模 平面形態は、円形に橢円形のものがくっついた三方向に突出する形である。主軸はN 8°W、長軸で1.35m、その直交方向で0.95mを測る。断面は皿形を呈し、最深部で検出面からの深さ15cmである。埋土は暗茶褐色土で、炭化物を含む。

出土遺物 須恵器と土師器の碗と小皿が纏まって出土、そして青磁片と白磁片が若干ある。さらに、刀子も出土している。

#### 土坑(SK) 2 (第9図、写真図版4・5中)

検出状況 南2区で検出した。土坑3の直ぐ西に位置する。

形態規模 平面形態は、橢円形を呈する。主軸はN 8°W、大きさは長軸で約0.70m、直交方向で約0.50mを測る。断面は皿形で、検出面からの深さは約8cmである。埋土は暗茶褐色で、炭化物を含む。

出土遺物 須恵器の碗と土師器の皿が出土している。

#### 土坑(SK) 3 (第9図、写真図版4・5下)

検出状況 南2区で検出した。土坑1・2の直ぐ東に位置する。この3基の土坑が一つの群を構成している。

形態規模 平面形態は長橢円形である。主軸はN 35°E、大きさは長軸方向で1.80m、直交方向で0.85mを測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは約8cmである。埋土は暗茶褐色で、炭化物を含む。

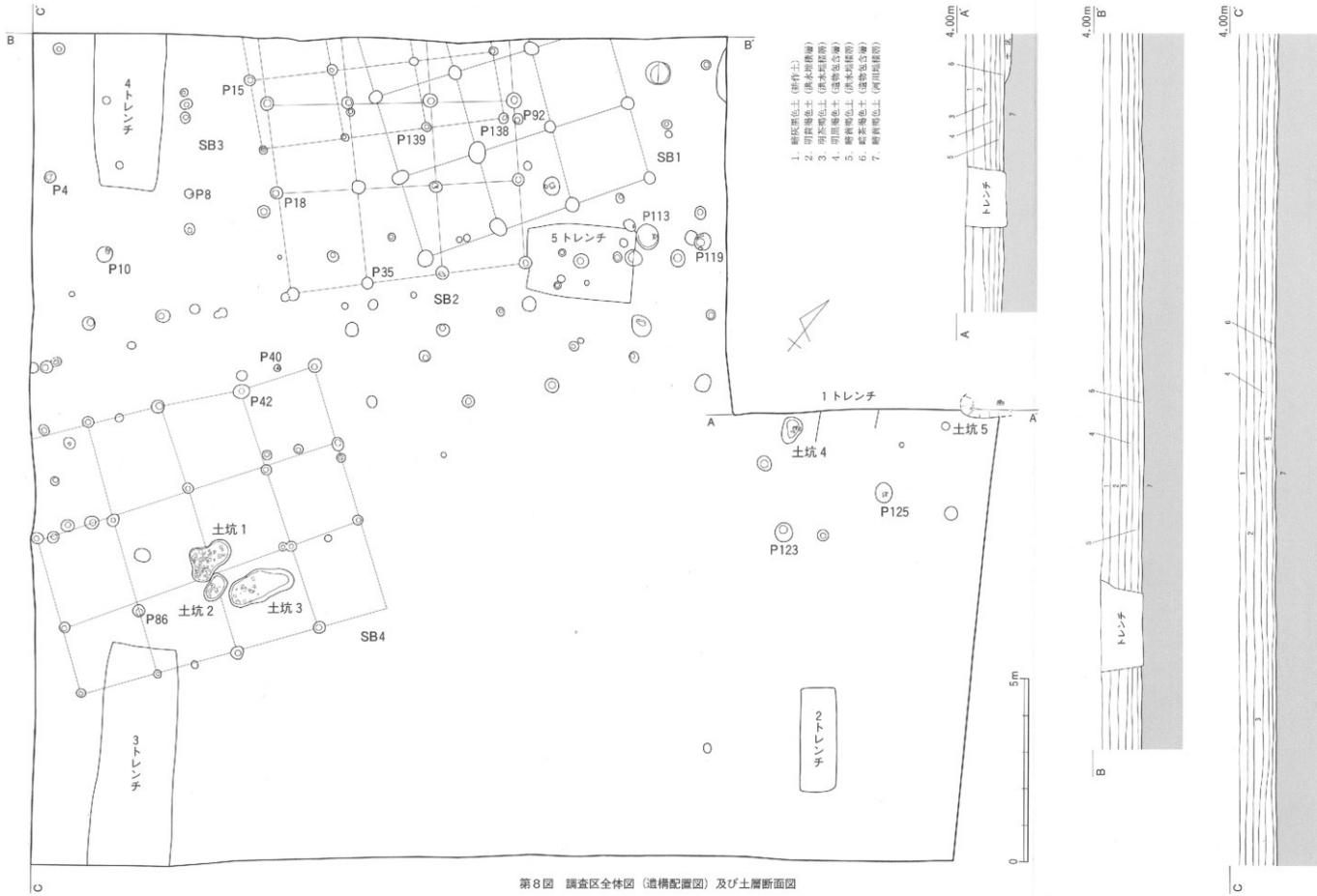
出土遺物 須恵器と土師器がある。土器片は、遺構の南側に集中している。

#### 土坑(SK) 4 (第10図、写真図版6上)

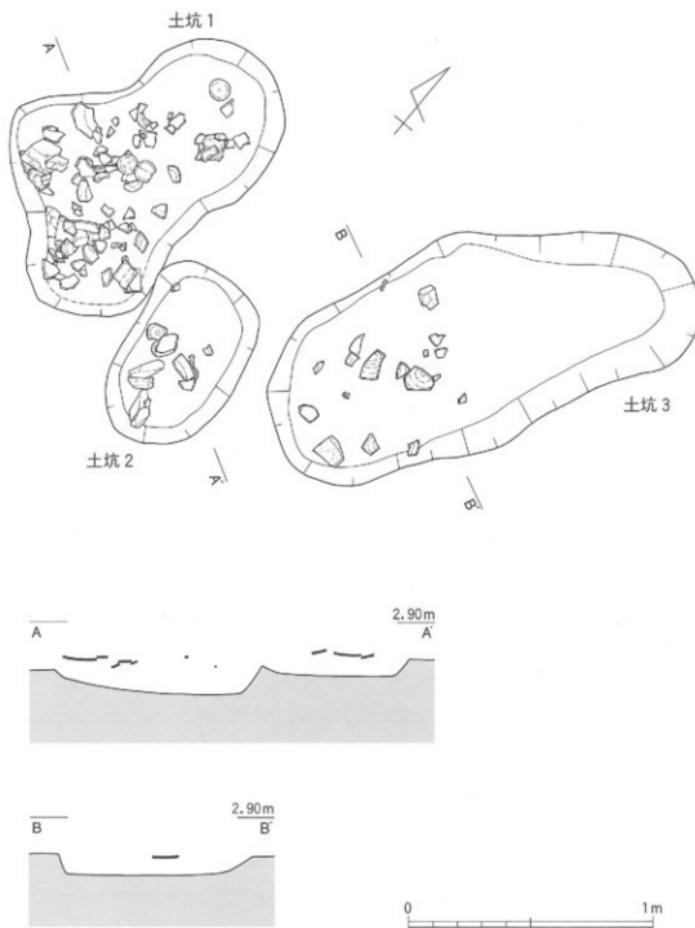
検出状況 北1区で検出した。土坑5の南西約5mに位置する。

形態規模 平面形態は橢円形である。主軸はN 5°W、大きさは長軸方向で約0.70m、直交方向で0.55mを測る。断面は浅いU字形を呈し、検出面からの深さは約15cmである。埋土は暗茶褐色で、炭化物を含む。

出土遺物 須恵器の碗と土師器の皿が出土している。



第8図 調査区全体図(遺構配置図)及び土層断面図



第9図 土坑(SK) 1～3 平面図及び断面図

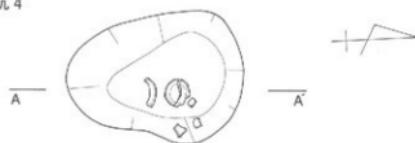
## 土坑(SK) 5 (第10図、写真図版6中)

検出状況 北1区で検出した。土坑4の北東約5mに位置する。

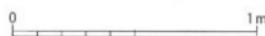
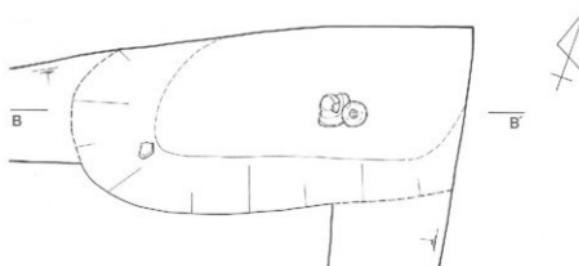
形態規模 平面形態は長椭円形である。主軸はN60°E、大きさは長軸方向で約1.60m、N8°W、直交方向で0.85mを測る。断面は浅いU字形を呈し、検出面からの深さは約20cmである。埋土は暗茶褐色で、炭化物を含む。

出土遺物 須恵器と土師器の楕がほぼ完形品で出土している。

土坑4



土坑5



第10図 土坑(SK) 4・5 平面図及び断面図

## 掘立柱建物跡(SB) 1 (第11図、写真図版7上)

**検出状況** 北1区・南1区にかけて検出した。掘立柱建物跡2・3と重複するが、建物を構成する柱穴相互には切り合い関係が認められない。また、建物の西側については調査区外に拡がるものと考えられる。

**形態規模** 衍行  $2 + \alpha$  間、梁間3間からなる総柱建物である。南衍行を基準とした棟軸方向はN54°W示す。東梁間は6.50m、平均柱間は2.15mを測る。南衍行は柱間が2.30mである。

**柱穴** 挖り方の平面形は円形もしくは椭円形を呈し、その規模は30cm~50cm、深さ50cmから65cmを測る。柱穴の規模から考えて、この遺跡の主屋となる建物であろう。また、大半のビットで柱痕を確認している。埋土は、暗褐色シルト質極細砂である。

**出土遺物** 土師器・須恵器片が出土したが、いずれも小片のため図化できなかった。

**時期** 掘立柱建物跡4との方向性の一一致から、平安時代後期(11世紀後半~12世紀初)と考えている。

## 掘立柱建物跡(SB) 2 (第12図、写真図版7下)

**検出状況** 北1区・南1区にかけて検出した。掘立柱建物跡1・3と重複するが、建物を構成する柱穴相互には切り合い関係が認められない。また、建物の西側については調査区外に拡がるものと考えられる。

**形態規模** 衍行  $2 + \alpha$  間、梁間3間からなる総柱建物である。北衍行を基準とした棟軸方向はN42°W示す。東梁間は6.50m、平均柱間は2.15mを測る。南衍行は柱間が2.50~2.70mと不均一であり、建物の平面形は歪である。

**柱穴** 挖り方の平面形は円形を呈し、その規模は30cm~40cm、深さ35cm~45cmを測る。また、大半のビットで柱痕を確認している。埋土は、暗褐色シルト質極細砂である。

**出土遺物** 土師器・須恵器・磁器片が出土した。

**時期** 出土土器(特に磁器)から、平安時代末期(12世紀後半)と考えている。

## 掘立柱建物跡(SB) 3 (第13図、写真図版8上)

**検出状況** 北1区・南1区にかけて検出した。掘立柱建物跡1・2と重複するが、建物を構成する柱穴相互には切り合い関係が認められない。また、建物の西側については調査区外に拡がるものと考えられる。

**形態規模** 衍行3間、梁間  $1 + \alpha$  間からなる総柱建物である。東衍行を基準とした棟軸方向はN45°E示す。東衍行は6.65m、平均柱間は2.21mを測る。南梁間は柱間が1.90mである。

**柱穴** 挖り方の平面形は円形を呈し、その規模は20cm~30cm、深さ25cm~45cmを測る。また、大半のビットで柱痕を確認している。埋土は、暗褐色シルト質極細砂である。

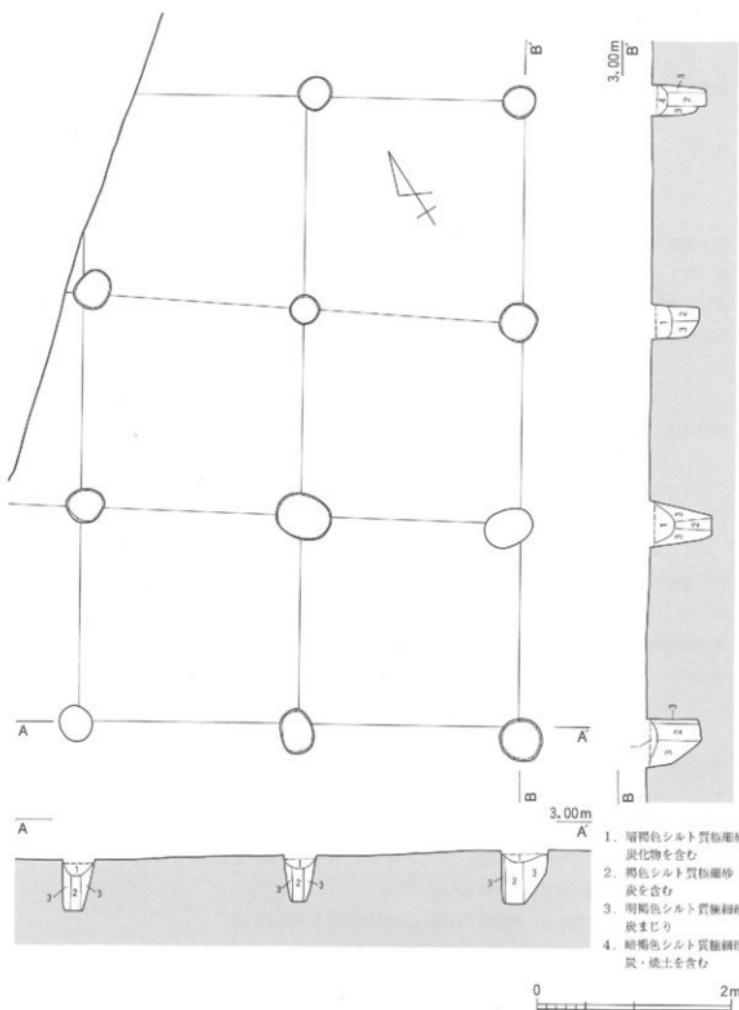
**出土遺物** 土師器・須恵器片が出土した。

**時期** 出土土器から、平安時代後期(12世紀前半)と考えている。

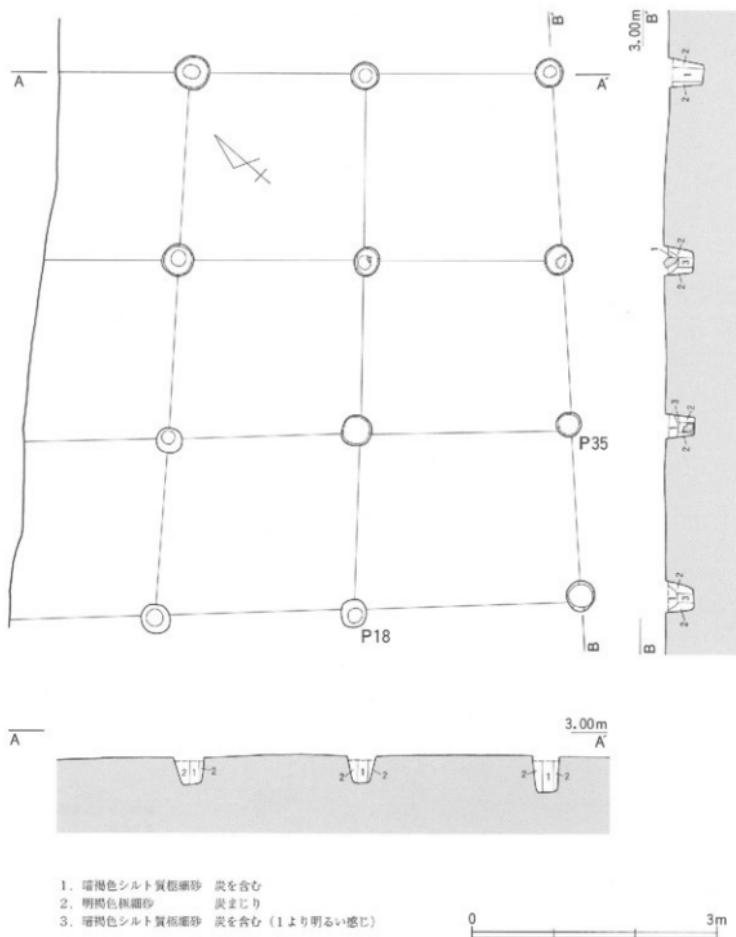
## 掘立柱建物跡(SB) 4 (第14図、写真図版8下)

**検出状況** 南2区にかけて検出した。土坑1・2・3と重複するが、建物を構成する柱穴とは切り合ひ関係が認められない。しかし、土坑1とこの建物の柱穴から出土した須恵器片に接合できるものがあることから、両者は一体のものと考えておきたい。また、南西隅の柱穴は調査区外であるが、ほぼ全体を検出することが出来た。

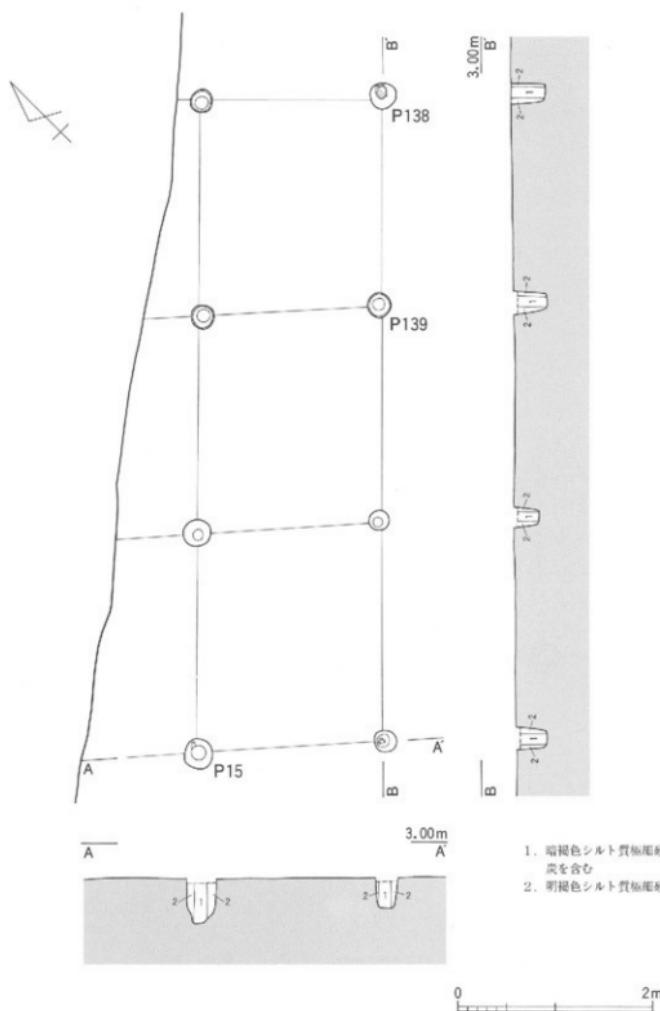
**形態規模** 衍行4間、梁間3間からなる総柱建物である。東衍行を基準とした棟軸方向はN36°Eを示



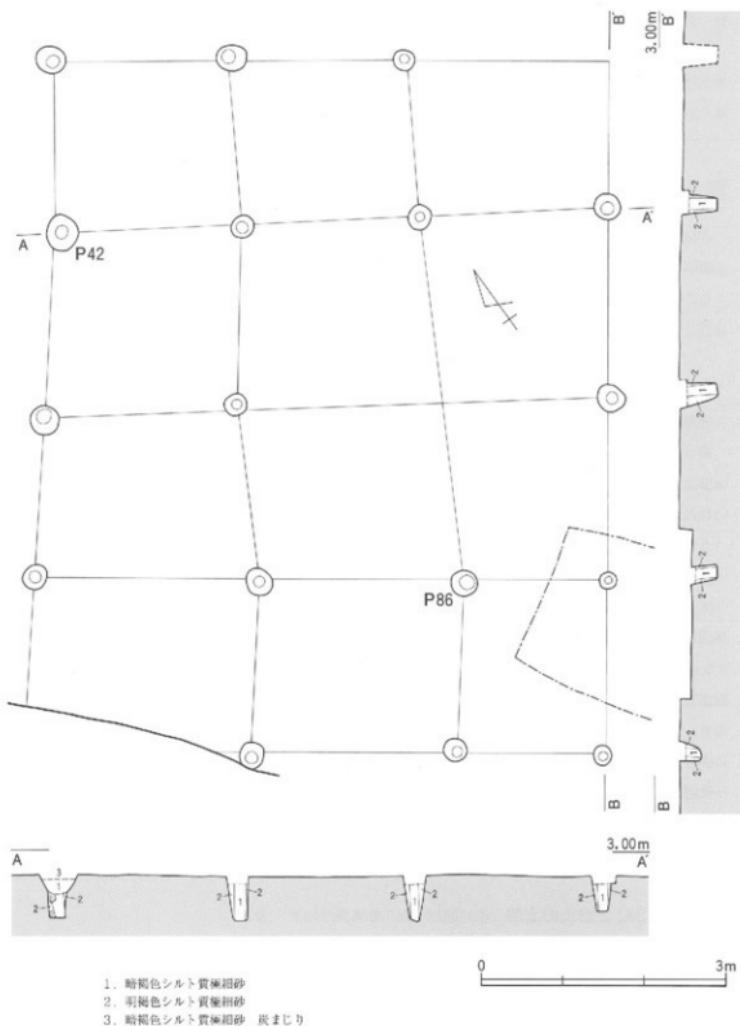
第11図 挖立柱建物跡(SB)1 平面図及び断面図



第12図 挖立柱建物跡(SB)2 平面図及び断面図



第13図 振立柱建物跡(SB)3 平面図及び断面図



第14図 振立柱建物跡(SB)4 平面図及び断面図

す。ただし、北東隅と土坑のある位置の柱穴は検出されず、桁行の柱の通りが直線的でない。

東桁行は8.60m、平均柱間は2.15mを測る。北梁間は6.70mである。面積は凡そ58.50m<sup>2</sup>を測る。

**柱 穴** 握り方の平面形は円形を呈し、その規模は20cm~45cm、深さ25cm~55cmを測る。また、大半のピットで柱痕を確認している。埋土は、暗褐色シルト質粘土である。

**出土遺物** 土師器・須恵器・磁器片が出土した。

**時 期** 出土土器から、平安時代後期（11世紀後半～12世紀初頭）と考えている。

### 第3節 出土遺物

今回の調査では、前記したように平安時代後期から末期の土坑と柱穴跡、そして包含層から出土した土師器・須恵器・磁器・鉄器などの遺物がある。

ここでは、造構及び包含層ごとに、須恵器・土師器・磁器に分けて記述する。なお、鉄器と鍛冶滓は最後にまとめて報告している。

#### 1. 土坑(SK) 1出土の土器（第15図1～17、写真図版12・13上）

**須恵器** 器種は椀、小皿がある。

椀（1）は形態化した平高台の底部にまだ湾曲する体部が付き、口縁部を外反させる。底部は糸切り、体部は回転ナデ。内外面の凹凸が著しい。復元口径14.9cm、器高5.5cm。（2）も口縁部の外反がない以外、同様の形態・成形である。復元口径15.3cm、器高5.3cm。（3、4）は直線的に立ち上がる椀の体部である。

（5）は糸切り後に輪高台を貼り付けた椀の底部。底部径7.6cm。（6）は小皿の体部片。復元口径8.3cm。  
**土師器** 器種は椀、小皿、鍋がある。

椀（7）はヘラ切り後ナデ調整した底部にゆるやかに湾曲する体部が付き、口縁部を少し外反させる。体部内面はコテ状工具痕を残す。復元口径14.7cm、器高4.5cm。（8～14）は小皿。8（口径8.0cm、器高2.0cm）、9（口径8.0cm、器高1.8cm）はヘラ切り底。10（口径8.3cm、器高2.1cm）、11（復元口径7.9cm、器高1.6cm）、12（口径8.6cm、器高1.5cm）、13（復元口径7.5cm、器高1.6cm）は底部の切り離しは回転糸切り。14はいわゆる「ての字状口縁」を持つ。復元口径8.5cm、器高1.9cm。鍋（15）は口縁部から体部にかけての破片で、「くの字状」に外反する口縁部を持つ。体部外面は刷毛目調整。復元口径36.7cm。

**磁器** 青磁、白磁がある。

青磁碗（16）は灰かぶりで、器表が荒れる。復元口径14.6cm。

白磁碗（17）はIV類。復元口径15.5cm。

#### 2. 土坑(SK) 2出土の土器（第15図18～22、写真図版13下・14上）

**須恵器** 器種は椀である。

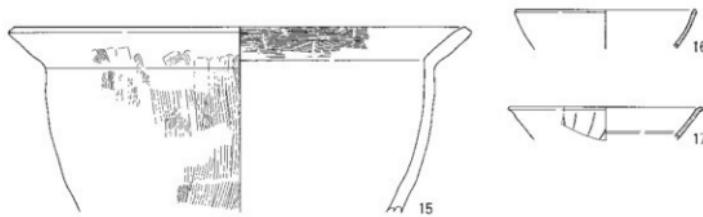
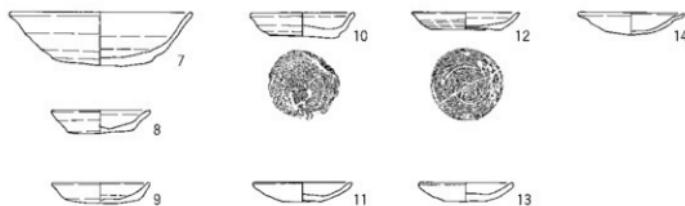
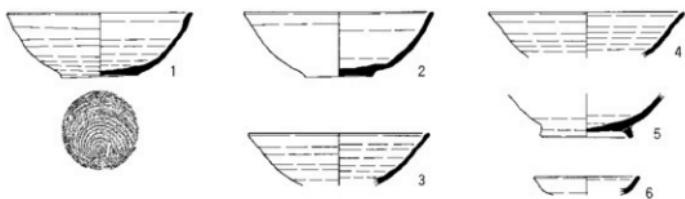
椀（18～20）は、ゆるやかに湾曲する体部から口縁部の破片である。内外面の凹凸が著しい。18は復元口径14.6cm、19は復元口径15.3cm、20は復元口径15.6cm。

**土師器** 器種は小皿、鍋がある。

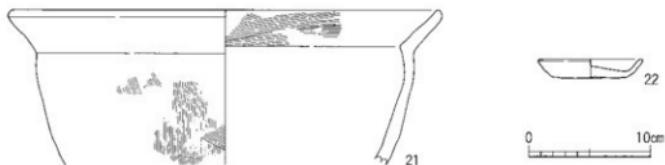
鍋（21）は口縁部から体部にかけての破片で、「くの字状」に外反する口縁部を持つ。復元口径35.0cm。

小皿（22）は回転糸切りの底部を持つ。口径8.3cm、器高1.6cm。

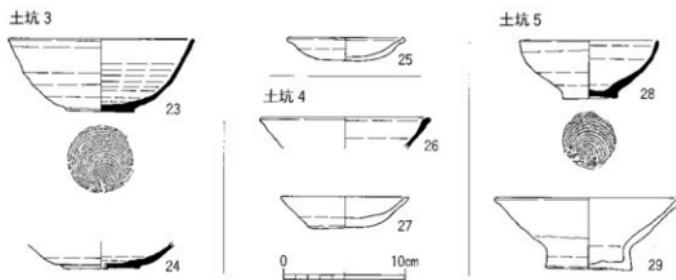
土坑1



土坑2



第15図 土坑(SK) 1・2 出土土器



第16図 土坑(SK) 3・4・5 出土土器

### 3. 土坑(SK) 3出土の土器 (第16図23~25、写真図版14中)

須恵器 器種は楕と小皿である。

楕 (23) は平高台の底部に、ゆるやかに湾曲する体部、そして直線的に延びる口縁部を持つ。底部は回転糸切り。内外面の凹凸が著しい。口径14.9cm、器高6.0cm。(24) は形骸化した平高台を持つ楕の底部である。底部は回転糸切り。底部復元径6.2cm。

土師器 器種は小皿である。

小皿 (25) は「ての字状口縁」に近い口縁部を持ち、端部は薄く伸ばしたものをお内側にまるめて、丸い端面をつくる。内底面は指押え。口径9.2cm、器高2.0cm。

### 4. 土坑(SK) 4出土の土器 (第16図26・27、写真図版14下)

須恵器 器種は楕である。

楕 (26) は直線的に伸びる口縁部、外反する端面を持つ。復元口径13.6cm。

土師器 器種は小皿である。

楕 (27) は回転ヘラ切りの底部に、直線的に伸びる体部・口縁部を持つ。口径10.4cm、器高2.6cm。

### 5. 土坑(SK) 5出土の土器 (第16図28・29、写真図版14下)

須恵器 器種は楕である。

楕 (28) は底部内面に段を持ち、体部をゆるやかに湾曲させる。底部は回転糸切り。口径11.2cm、器高4.8cm。

土師器 器種は楕である。

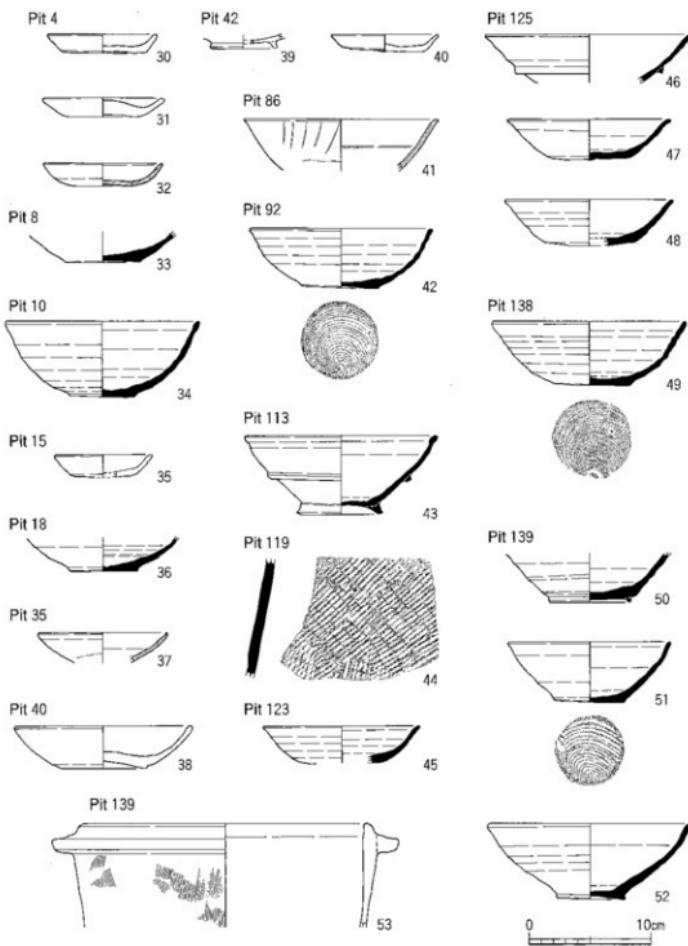
楕 (29) は托状形の器形。底部は回転糸切り。口径14.9cm、器高6.4cm。

### 6. ピット(Pit)群出土の土器 (第17図30~53、写真図版15・16・17上)

ピット(Pit) 4 土師器と瓦器

土師器小皿 (30、31) は、回転糸切りの底部を持つ。30は口径8.8cm、器高1.6cm。31は復元口径10.0cm、器高1.6cm。

瓦器 (32) は、体部内面をヘラ磨きする小皿である。復元口径9.7cm、器高1.9cm。



第17図 ピット(Pit)群 出土土器

## ピット(Pit)8 須恵器

須恵器(33)は、形骸化した平高台を持つ椀の底部である。底部は回転糸切り。底部復元径6.3cm。

## ピット(Pit)10 須恵器

須恵器(34)は形骸化した平高台の底部に、ゆるやかに湾曲した体部と口縁部を持つ椀である。底部は回転糸切り。内外面の凹凸が著しい。復元口径15.7cm、器高6.2cm。

## ピット(Pit)15 据立柱建物跡3 土師器

土師器（35）は、底部回転ヘラ切りの小皿である。復元口径7.7cm、器高1.9cm。

ピット(Pit)18 挖立柱建物跡2 須恵器

須恵器（36）は、形骸化した平高台を持つ椀の底部である。底部は回転糸切り。底部復元径5.6cm。

ピット(Pit)35 挖立柱建物跡2 磁器

磁器（37）は白磁の皿。

ピット(Pit)40 土師器

土師器（38）は、底部回転糸切りの椀である。復元口径は14.4cm、器高3.5cm。

ピット(Pit)42 挖立柱建物跡4 土師器

土師器（39）は、貼り付け高台を持つ椀の底部である。復元底部径5.5cm。（40）は底部ヘラ切りの皿である。口径8.5cm、器高1.4cm。

ピット(Pit)86 挖立柱建物跡4 磁器

磁器（41）は、外面に退化した蓮弁文を持つ白磁の碗である。

ピット(Pit)92 須恵器

須恵器（42）は形骸化した平高台を持つ底部に、ゆるやかに湾曲した体部と口縁部を持つ椀である。底部は回転糸切り。内外面の凹凸が著しい。復元口径15.1cm、器高4.9cm。

ピット(Pit)113 須恵器

須恵器（43）は糸切りの底部に高台を貼り付け、直線的に伸びた体部に突帯を巡らせた椀である。口縁端部は外反させる。復元口径は15.4cm、器高6.6cm。

ピット(Pit)119 須恵器

須恵器（44）は内面同心円文、外面格子叩きの壺体部片である。

ピット(Pit)123 須恵器

須恵器（45）は底部ヘラ切り、外反させた口縁端部を持つ椀である。復元口径は12.6cm、器高3.0cm。

ピット(Pit)125 須恵器

須恵器（46）は、直線的に伸びた体部に突帯を貼り付ける椀である。口縁端部は外反させる。復元口径は16.5cm。（47、48）は底部回転ヘラ切りの椀である。47は口径13.0cm、器高3.4cm。48は復元口径13.5cm、器高3.8cm。

須恵器ピット(Pit)138 挖立柱建物跡3 須恵器

須恵器（49）は形骸化した平高台を持つ底部に、ゆるやかに湾曲した体部と直線的に伸びる口縁部を持つ椀である。底部は回転糸切り。外面は凹凸が著しい。復元口径15.7cm、器高5.3cm。

ピット(Pit)139 挖立柱建物跡3 須恵器と土師器

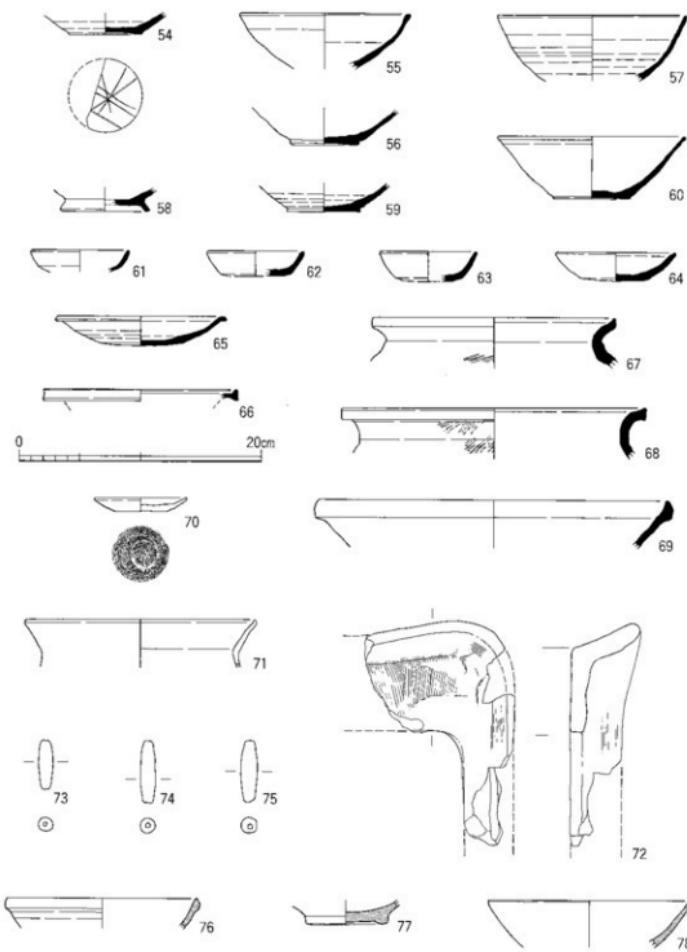
須恵器（50）は底部に高台を貼り付け、直線的に伸びた体部を持つ椀である。底部径6.7cm。（51、52）は底部回転糸切りの椀である。51は口径13.1cm、器高5.0cm。52は口径16.4cm、器高6.2cm。

土師器（53）は、口縁端部直下に鉢を巡らす羽釜である。体部外面に纏刷毛を施す。復元口径は23.2cm。

## 7. 包含層出土の土器類（第18図54～78、写真図版17下・18・19上中）

須恵器 器種は椀、小皿、皿、壺、壺、鉢がある。

椀（54～60）は体部が直線的に伸びるもの（54、55、60）、体部がゆるやかに湾曲するもの（57）があ



第18図 包含層 出出土器類

る。底部は平高台のもの(56、59)、貼り付け高台のもの(58)がある。また、54の底部外面にはハラ記号があり、58は体部に突帯が付くタイプである。60は復元口径15.2cm、器高5.1cm。

小皿(61~64)は底部がハラ切りのもの64と、糸切りのもの62、63がある。64は口径9.7cm、器高2.4cm。(65)は、底部回転ハラ切りの皿である。復元口径は13.6cm、器高2.5cm。

(66)は、壺の口縁部である。復元口径は15.7cm。

(67、68)は壺の口縁部である。67は「くの字状」に外反し、端部をつまみ上げる。体部外面は平行凹

き。復元口径は19.6cm。68は外反した口縁を真横に延ばし、端部を軽く拡張させる。復元口径は24.6cm。

(69) は捏鉢の口縁部である。端面を上方に大きく拡張している。復元口径は28.3cm。

土師器 器種は小皿、壺と甕がある。

(70) は底部糸切りの小皿である。復元口径は7.5cm、器高1.1cm。

(71) は「くの字状」に外反し、端部をつまみ上げた甕の口縁部である。復元口径は18.7cm。

(72) は甕焚き口の底部である。

白磁 器種は碗である。

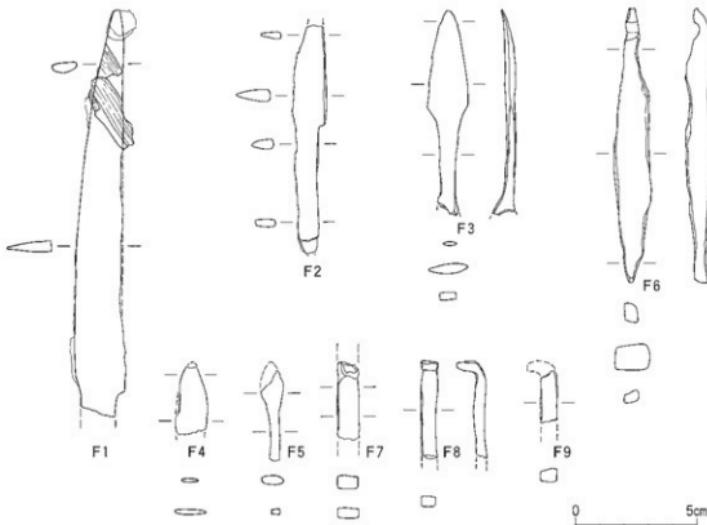
(76、77) は碗で、IV類に属する。(78) はVI類である。なお、写真のみの掲載であるがII類に属するものが1点ある。

その他、管状土錐が3点ある。何れも土師質の小型品で、最大のもの (74) は長さ5.2cm、幅1.25cm、重量8.1gである。

## 8. 鉄器類 (第19図F 1～9、写真図版19下・20)

F 1は、土坑1検出の刀子で茎部を欠く。現存長16.7cm、身部最大幅2.0cm・厚み4.0mmである。F 2も刀子。現存長9.4cm。F 3は鎔。現存長8.5cm、刃部の長さは4.0cm、最大幅1.7cm・厚み4.0mmを測る。F 4(ピット123出土、現存長2.8cm)・5(ピット125出土、現存長3.8cm)は鎌である。F 6～9は和釘。6は合釘。8・9は折釘であろう。

その他、包含層出土の鐵滓(写真図版20下)が9点ある。平均長2.0cm×3.0cm、厚み1.0cm。最大のものは4.7cm×4.1cm、厚み1.4cmを測る。鍛冶滓であろう。



第19図 土坑・ピット群及び包含層 出土鐵器類

## 第4章 まとめ

### 第1節 下高谷遺跡の遺構の年代

赤穂市下高谷地域には、これまで遺跡の存在が確認されていなかった。今回、初めて発掘調査を実施した結果、第3章に述べたように平安時代後期から末期にかけての集落（屋敷跡の一部）が明らかとなつた訳である。

最後に、発見された下高谷遺跡の遺構の年代（第1節）と、性格及びその位置付け（第2節）を記して、まとめにかえたい。

まず、掘立柱建物跡の時期をピット出土の遺物と共に伴う土坑から検討してみよう。

掘立柱建物跡4の柱穴から出土した土器類は、凡そ12世紀初頭頃と捉えることができる。さらに、土坑1・2・3・4・5は、出土遺物（特に、須恵器の掩）の年代比定から11世紀後半～12世紀初頭と考えられる。掘立柱建物跡4はこのうち1～3の土坑が伴うと想定でき、この時期に押さえることが可能となろう。

掘立柱建物跡1では、柱穴から確実な年代を比定できる土器等の出土遺物が認められなかつた。そのため時期決定は難しいのであるが、先の掘立柱建物跡4と建物主軸方向がほぼ直交することから言えれば、同時期に存在したと考えてもおかしくない。11世紀後半～12世紀初頭と推測する。なお、柱穴の大きさから見ると、建物1が主屋となるのであろう。

掘立柱建物跡2は柱穴出土遺物の年代比定が12世紀前半～後半であり、特にピット35出土の白磁（37）が12世紀後半代もしくはもう少し新しくなるため、建物跡では一番新しい12世紀後半としておきたい。

そして、掘立柱建物跡3は柱穴から出土した遺物の年代が凡そ12世紀前半代のものであることから、この時期と捉える。

以上、建物跡1～3は柱穴の切り合い関係はないものの、重複する位置に建つ上年代が異なるのは明らかであり、建物跡1を最古の11世紀後半～12世紀初頭（第Ⅰ期）に捉え、建物跡3を12世紀前半（第Ⅱ期）、建物跡2を12世紀後半（第Ⅲ期）と考えておきたい。

次に、出土遺物の中で注意されるものにかなりの量の輸入陶磁器と須恵器の掩がある。輸入陶磁器は12世紀代を中心に、青磁・白磁の高級品も含まれる。また、旧赤穂郡内や近隣の旧掛保郡には広く相生古窯址群が分布し、特に11世紀末～12世紀前半頃には緑ヶ丘窯址群を中心に再開された那波野丸山窯址、掛西大陣原窯址等が操業している。中でも、那波野と掛西地区では供給先は不明であるものの、瓦陶兼業窯であることが注目されている。

そして、下高谷遺跡出土の須恵器には緑ヶ丘窯址産の体部に突帯を巡らす輪（43・46・58）や体部が直線的に立ち上がる輪（2・51・52等）と、大障原窯址産の体部が湾曲し内外面とも凹凸の激しいもの（1・34・42・49等）が多く認められるのである。

その他、分析はしていないが鍛冶溝が包含層中から出土しており、屋敷内で鍛冶を行つたことも理解できる。

## 第2節 遺跡の性格及びその位置付け

さて、遺跡の性格については高級品の白磁・青磁を持つことから、以下のように考えたい。

下高谷を含むこの地域（坂越）は平安時代の後半から、近衛家領の莊園（坂越莊）であった。近衛家は（藤原）基実が平清盛の娘婿となって以来、平氏と結びつき平氏と妥協しながら栄えてきた家柄である。基実の死後は殿下御領の半ばを未亡人平盛子が譲り受け、実質は平氏のものとなっていた。

おそらく、坂越莊も平氏（預所職は平信範）との関係が強かったと推測される。そのため、在地の武士勢力も平氏の与党であった可能性が極めて高いのである。

源平の戦いの後は、源頼朝の御誕別当梶原景時が攝磨・美作の守護として治安に当たった。

こうした流れの通りであれば、下高谷遺跡（屋敷跡）の住人はかなりの量の青磁・白磁を持つことからも、日宋貿易に力を注いだ平氏与党的武士勢力と考えられる。そして、第Ⅱ期の建物築造の後、平氏の都落ち（1183年）とともに西国に遷り、没落したものと捉えられるのである。

なお、この屋敷は在地武士の館と考えるが調査区内には塙等も無く、実態は古代以来の天然の良港（湊）坂越の浦（泊）に隣接することから、輸入陶磁器等各種物資の保管施設の機能を果たしたとも推測している。

### 参考文献

- 赤穂市史編纂専門委員編『赤穂市史』第1巻 赤穂市 1981年  
種定淳介編『大陣原古窯跡群』 兵庫県文化財調査報告第140冊 1995年  
中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995年  
中田宗伯編『周世・入相遺跡発掘調査報告』Ⅳ 赤穂市文化財調査報告第46集 1998年  
藤田忠彦編『高雄・根木遺跡発掘調査報告書』 赤穂市文化財調査報告第50集 2000年  
森内秀造編『相生市・緑ヶ丘窯址群』Ⅱ 兵庫県文化財調査報告第139冊 1995年  
山本三郎編『堂山遺跡』 兵庫県文化財調査報告第142冊 1995年  
横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978年

# 写 真 図 版



調査地区遠景（南西から）



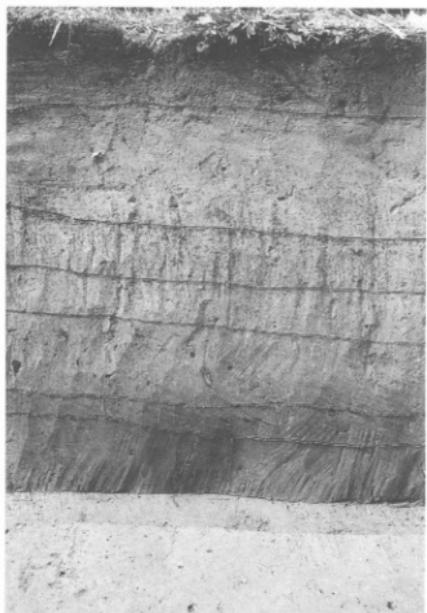
調査地区近景（南西から）



調査地区全景（南西から）



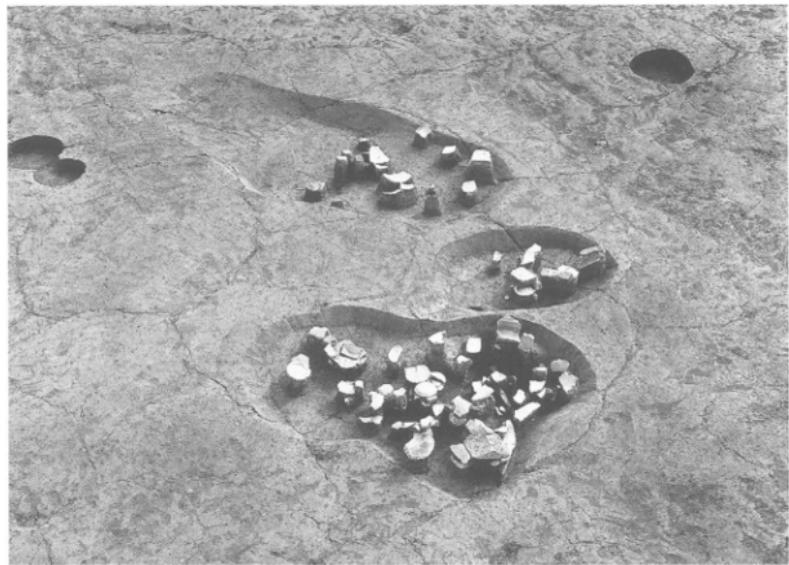
調査前近景（北西から）



土層断面



遺構全景（南東から）



土坑(SK) 1~3 (西から)



土坑(SK) 1  
(西から)



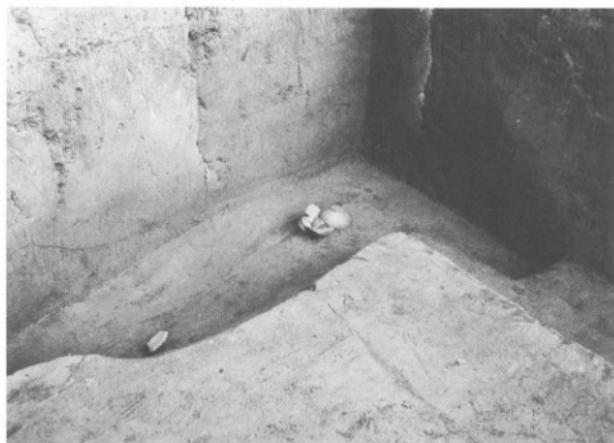
土坑(SK) 2  
(北から)



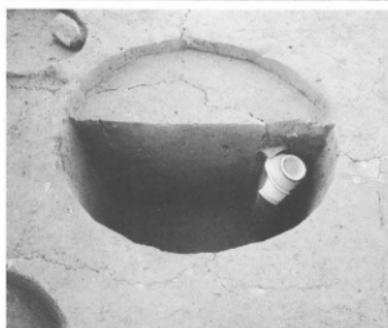
土坑(SK) 3  
(北から)



土坑(SK) 4  
(北東から)



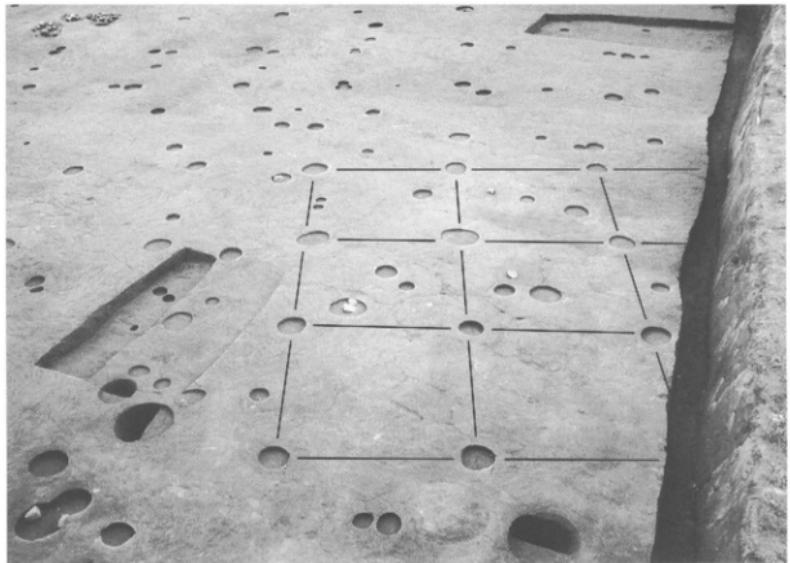
土坑(SK) 5  
(南東から)



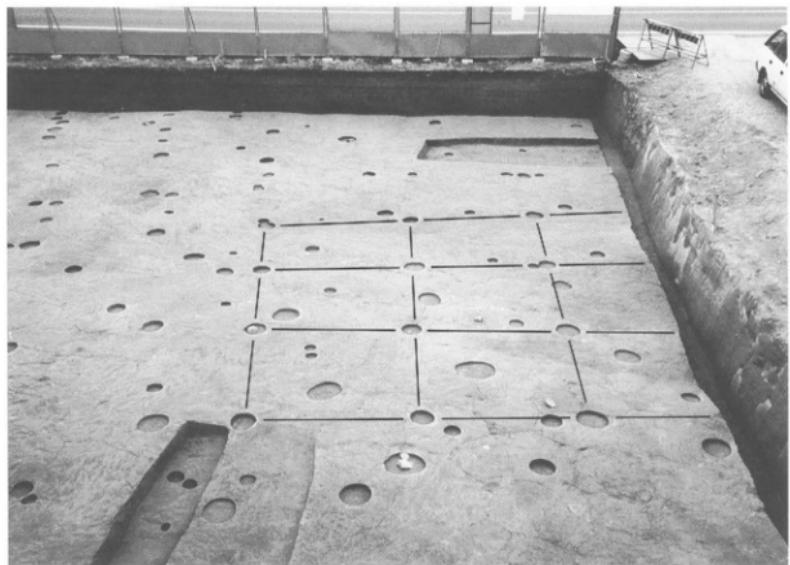
Pit 113



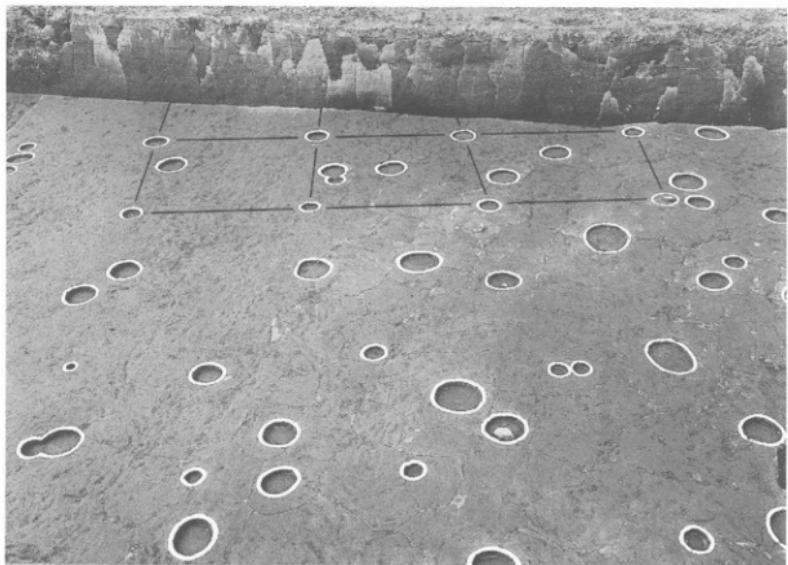
Pit 123



掘立柱建物跡 1 (北から)



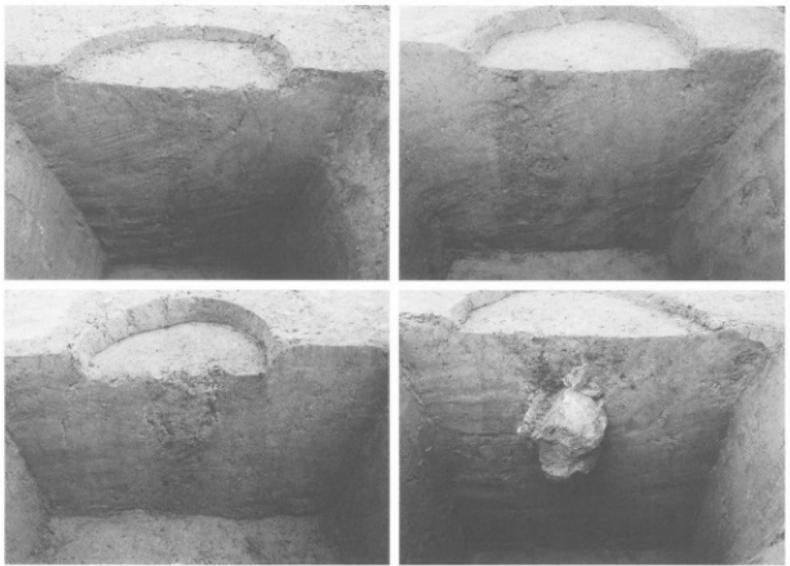
掘立柱建物跡 2 (北東から)



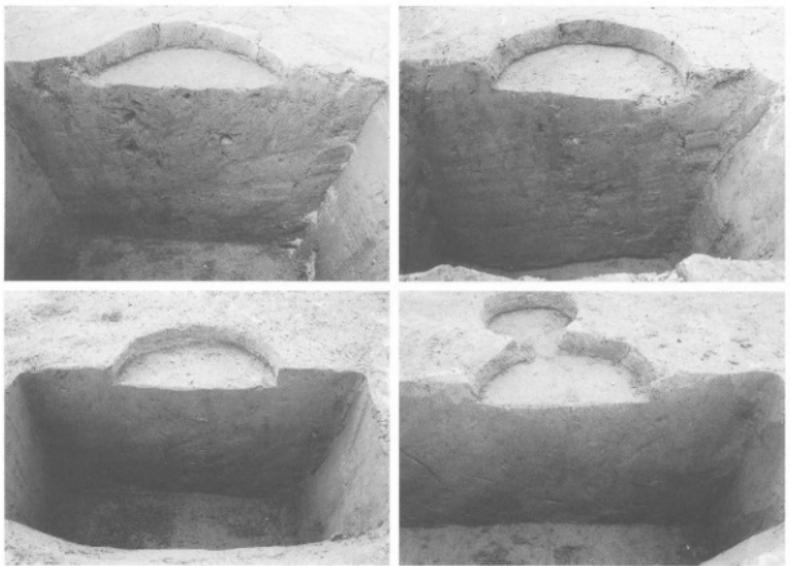
掘立柱建物跡 3 (南東から)



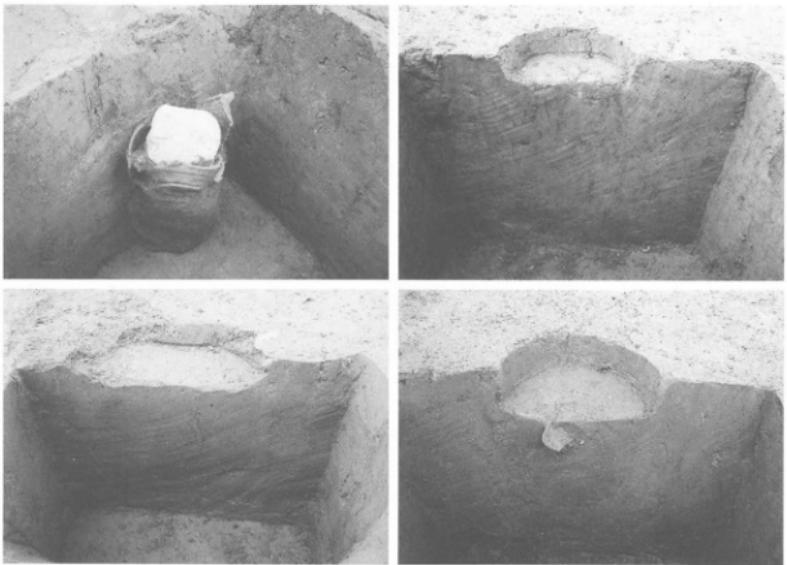
掘立柱建物跡 4 (北から)



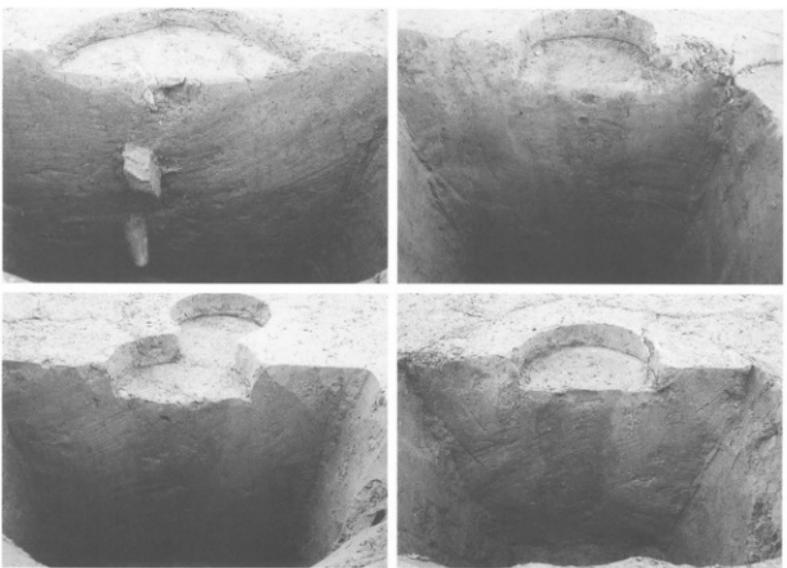
掘立柱建物跡 1 Pit 群 断ち割り



掘立柱建物跡 2 Pit 群 断ち割り



掘立柱建物3 Pit群 断ち割り



掘立柱建物4 Pit群 断ち割り



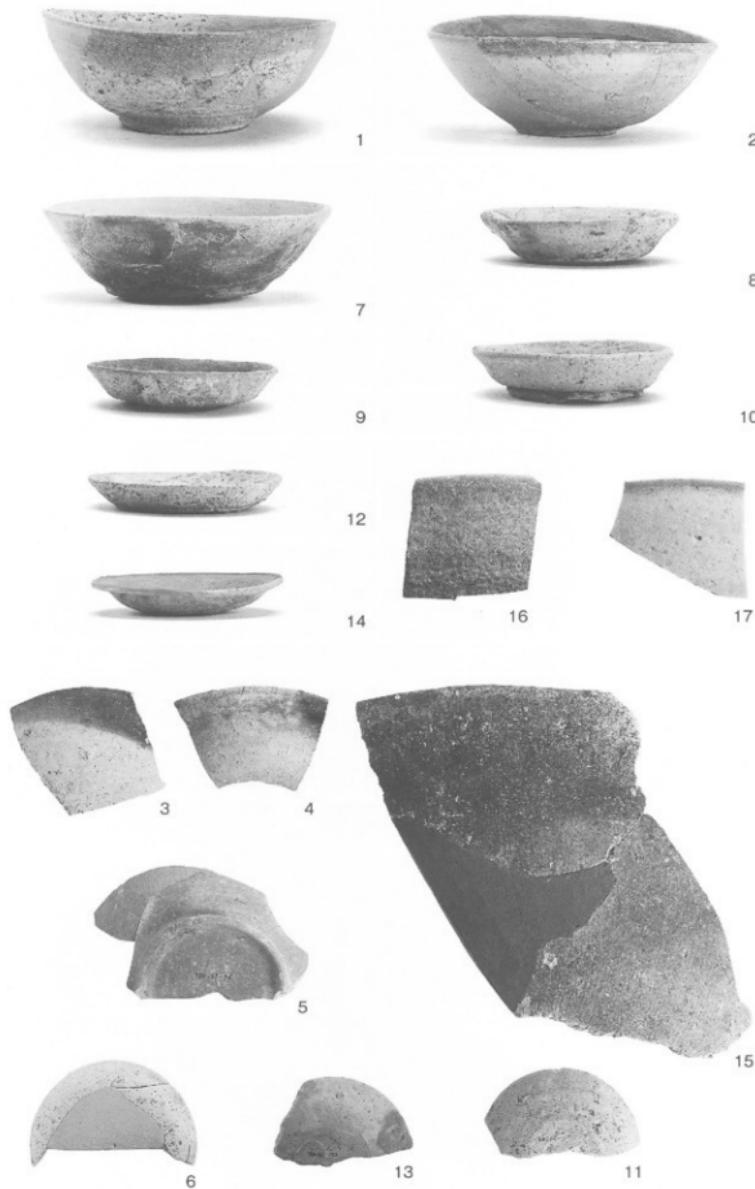
試掘調査



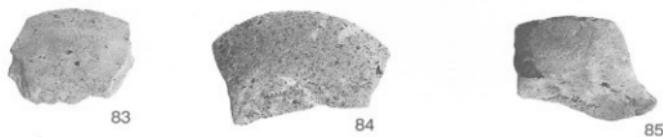
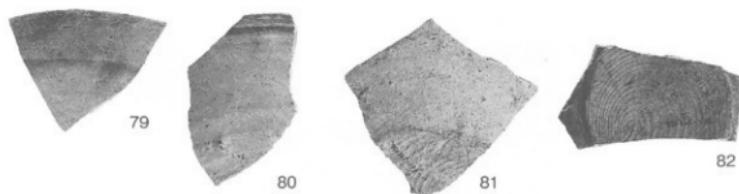
人力掘削



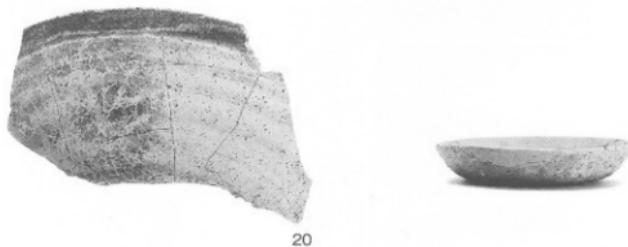
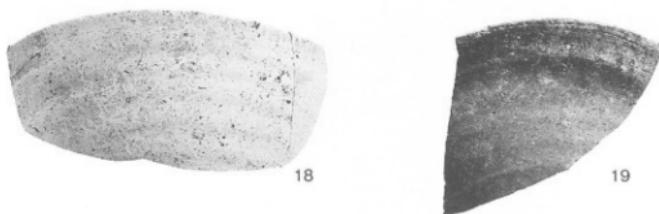
遺構掘削



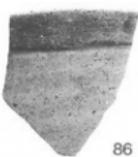
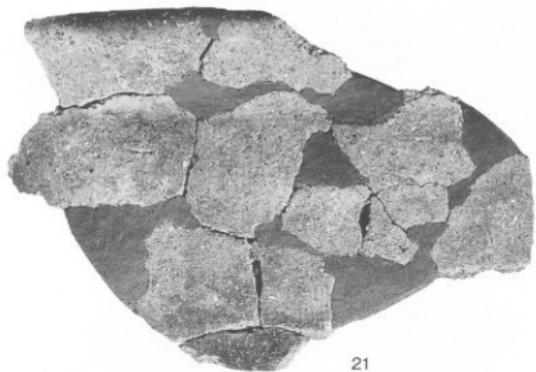
土坑(SK) 1 出土遺物 ①



土坑(SK) 1 出土遺物 ②

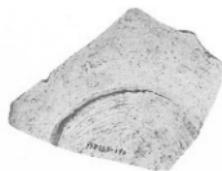


土坑(SK) 2 出土遺物 ①



86

87



25



27



29

土坑(SK)2 出土遺物 ② 土坑(SK)3・4・5 出土遺物



30



32



34



38



42



43



47



49



51



52



31



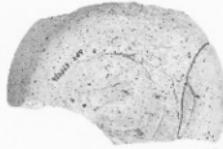
33



36



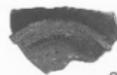
35



40



44



39



37



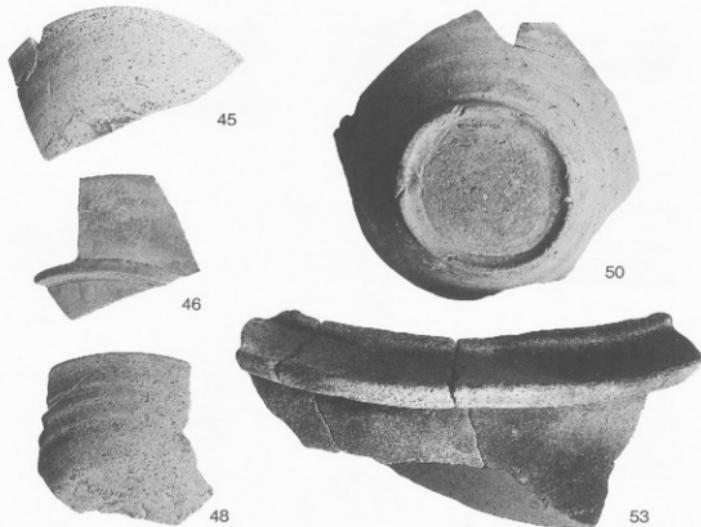
41



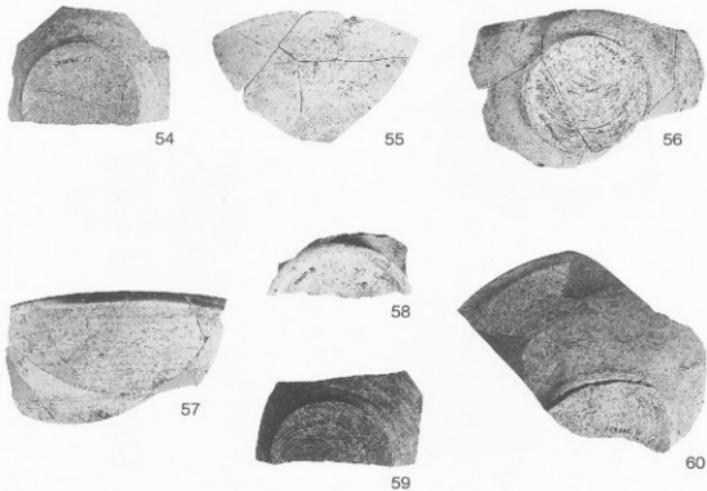
88



89



Pit群 出土遺物 ③



包含層出土遺物 ① 須恵器



61



65



67



62



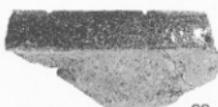
68



63



66



69



70



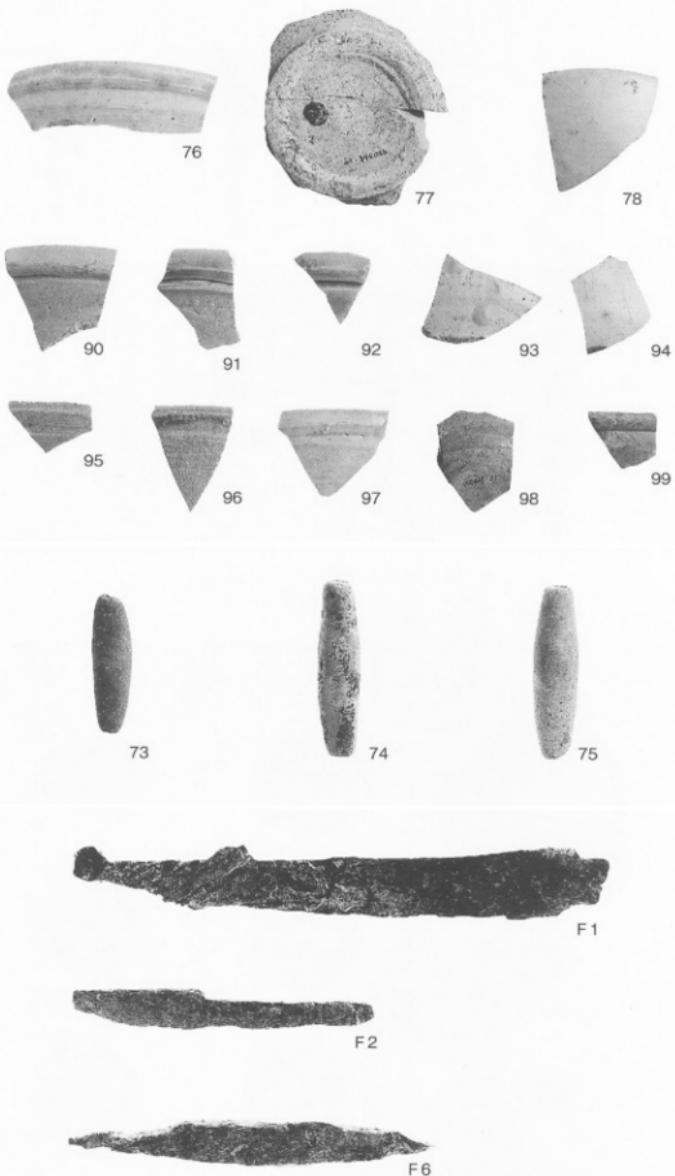
64



72



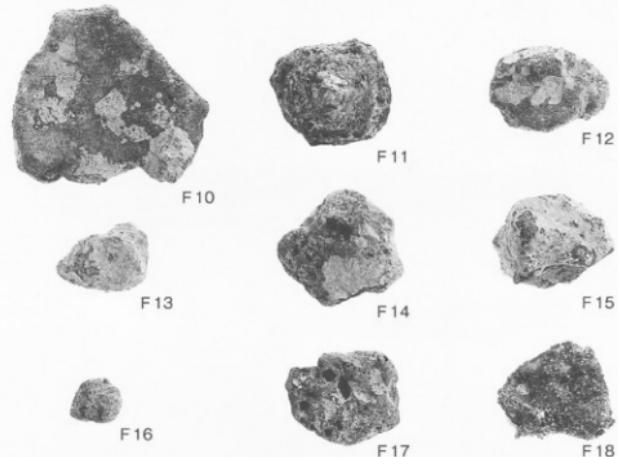
71



包含層出土遺物 ③ 磁器・土錘・鉄器 ①



包含層出土遺物 ④ 鉄器 ②



包含層出土遺物 ⑤ 鍛冶滓

# 報告書抄録

ふりがな	しもたかやいせき							
書名	下高谷遺跡							
副書名	坂越郵便局庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第291冊							
編著者名	大平茂							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 Fax 078-531-7011							
発行年月日	西暦2006(平成18)年2月22日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
しもたかやいせき 下高谷遺跡	兵庫県 赤穂市 坂越字 下高谷 1852-1	950195 分布調査 282120 950365 本調査	34° 45' 55"	134° 25' 29"	1995.7.20 1996.1.18 ~3.7	93.0m <sup>2</sup> 557.0m <sup>2</sup>	坂越郵便局 庁舎 新築工事	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
下高谷遺跡	集落跡	古代(平安時代 後期~末期)	掘立柱建物 土坑	輸入陶磁器 須恵器 土師器 鉄器				

兵庫県文化財調査報告 第291冊

赤穂市

## 下高谷遺跡

—坂越郵便局庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2006年(平成18年)2月22日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

TEL (078) 341-7711

印刷 水山産業株式会社

〒653-0012 神戸市長田区二番町3丁目4番1号